
仮面ライダーディケイド 本当のライダー大戦

水城柳羅

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

仮面ライダー・ディケイド 本当のライダー大戦

【NNコード】

N38730

【作者名】

水城柳羅

【あらすじ】

すべてのライダーを敵に回してしまった門矢士 仮面ライダー・イケイド。

『来るなら来い、全てを破壊してやる!』
破壊者と化したその瞳は何を見る?

多くの視聴者をいよいよに裏切った2009年冬の陣公開から早10ヶ月。

やはり書くとしたらまずはこれかなと思い、あの有名な偽予告を面白いように使おうとしたくらいでみた執筆者だが、何せ初心者で闘いのシーンが物凄く苦手という、ライダー小説を書くのに一番最悪な欠点を持っているのだが、それでもがんばって書いてみた。いろいろと不自然なところもあるだろうが、田をつぶつてみていただきたい。

主要キャスト陣紹介

すべてのライダーを敵に回してしまった門矢士 **仮面ライダーディケイド**。

『来るなら来い、全てを破壊してやる!』

破壊者と化したその瞳は何を見る?

主要キャスト陣紹介

門矢士（**仮面ライダーディケイド**）

光夏海（後の**仮面ライダー キバーラ**）

小野寺ユウスケ（**仮面ライダークウガ**）

海東大樹（**仮面ライダー ディエンド**）

光栄次郎
キバーラ

鳴滝（本当の正体は・・・？）

紅渡（**仮面ライダー キバ**）

剣崎一真（**仮面ライダー 剣**）

津上翔一（**仮面ライダー アギト**）

城戸真司（**仮面ライダー 龍騎**）

乾巧（**仮面ライダー ファイズ**）

ヒビキ（**仮面ライダー 韶鬼**）

天道総司（**仮面ライダー カブト**）

野上良太郎（**仮面ライダー 電王**）

五代雄介（仮面ライダークウガ）

主要キャスト陣紹介（後書き）

みなさん、初めまして！水城柳羅といいます。
これまでためにためてきたものを一気にここに出していくこうと思ってます。

文章が結構おかしいところもあると思いますが、
大体は田をつぶつていただきたいです（汗）
誤字・脱字等は、教えてください！！

これから頑張つて更新していくので、
応援よろしくお願ひいたします。

水城柳羅

プロローグ　すべてはここから始まつた・・・

『ウオオオオオオオオオオ！－！』

激しい叫び。激しい攻撃の渦の中に、一人の女が立ちつくしていた。

「なぜこんなことに・・・？」

白いドレスはもうすでに黒ずんでいる。

彼女の名前は光夏海。

自分の格好などどうでもよかつた。目の前で起こりつつのことのほうが彼女にとって、重要なことだったのだ。

今まで旅をしてきた中で出会つてきたライダーばかりが一人のライダーを倒すために闘つていた。

「そうだ・・・コウスケ！」

夏海は思い出したように、隅に倒れていた一人の男に駆け寄つた。先ほどの闘いで、ある人物をかばつたせいで命を落としてしまつていた。もう彼は目覚めない。でも夏海にとってそんなことは関係ない。今はあの一人のライダーを救うために動くことしかできなかつたのだ。むだだと知りながらも・・・。

「コウスケ！ 目を覚ましてください！－！ コウスケ！」

それをじつと見つめる男がいた。ベージュのハットにベージュのコートをかぶつた謎の人物・・・。そのそばには白くて小さい蝙蝠がとんでいた。

「ねえ、鳴滝さん。アタシにいい考えがあるんだけど、どう?」

謎の男 - 鳴滝と呼ばれた男 - は、黙り込んだまま動かない。一点を睨みつけたまま。

蝙蝠はそれをどうしたのかはわからないが、夏海の傍へ向かっていった。

「夏海ちゃん、わたしがよみがえらせてあげようか?」

「え? キバーラが? どうやって?」

白蝙蝠 - キバーラ - はユウスケと呼ばれた男の人差し指を噛んだ。するとどうだろ? 一瞬にしてよみがえったのである。

「ただし、アルティメットクウガとしてね。」

「え? ユウスケ? きやつ!」

ユウスケは夏海を突き飛ばし、一人のライダーのもとへと駆け寄る。

「・・・変身・・・!」

仮面ライダークウガ。みんなの笑顔を守るために戦う。それが彼の使命だった。

しかし、今の姿はそんな使命のかけらもない。一目散に駆け寄るその姿を見たマゼンタ色のライダー - 仮面ライダーディケイド - は、驚いたような表情をした。

「・・・ユウスケ・・・?」

そのまま突いて攻撃を仕掛けてくる他のライダー達。

少し離れたところでその様子をつかがうシアン色のライダー・仮面ライダー・ディエンド・。

闘いに加わろうともしなければ、ディケイドの援助にもいかない。ただ、その様子眺めていた。

(今が潮時かもしれないな・・・)

そのとき。

大勢のライダー達の動きが止まった。

ディケイドに「ディエンドライバーを向ける」ディエンドを見て。

「・・・海東。」

「土・・・(少し我慢してくれ)」

「え・・・?」

『バンッ！――――――――――――』

一発の銃声が放たれた。

その様子をニヤリと笑いながら去っていく鳴滝とキバーラ。

大勢のライダーが呆然と立ち尽くす。

夏海「・・・ライケイド」

プロローグ すべては「」から始ました・・・（後書き）

はい！わかりにくくいプロローグが終了しました！（爆
まあ簡単に言つと、ほとんど本編最終回のあの場面と同じです。
若干鳴滝の言葉を入れたり、いろいろと変えたりしたところもありますが、大体一緒です）（笑
最後の夏海の叫びも同じです。

今後の進め方としては、あの偽予告を元に私が考えるライダー大戦
小説を書きあげていこうと思つています。
もうすでに構想・執筆は最後のほうまで進んでるので、完結までの時間は短いかなあと思つています。ただ、UPが遅れるかもしれませんけど（笑

それではまた第1話にてお会いしましょう。

全てを破壊し、全てを繋げ！

第一話 テイヒンドヒヨ人のライダー（前書き）

「これまでの仮面ライダー『ティケイド』は……

夏海「ユウスケ！起きてくださいー！」

キバーラ「アタシが蘇らせてあげようか？ただしアルティメットクウガとしてね」

DED「（あらわら潮時か）」

DCD「・・・海東。」

DED「土・・・（少し我慢してくれ）」

DCD「え・・・？」

『バンッ！――――――――――――』

夏海「・・・ティケイド――――――――――」

世界の破壊者『ティケイド』、その瞳は何を見る？

第一話 ティーンドヒョウ人のライダー

夏海「（大樹さんが土君を・・・？！）」

黒ずんだ白いドレスを着た光夏海は混乱していた。
目の前には倒れこんだティケイド、9人のライダーに囲まれたティ
エンドが立っていた。

しかし、混乱しているのは夏海だけではなかつた。

Eキバ「ティエンド、あなたはいつたい何をしようとしているので
すか？」

D E D「別に？僕がしたいよ！」やるだけさ。邪魔をするなら君た
ちも撃つけど？」

K剣「ふつ。この状況でよく言えるな。お前の役目を忘れたのか？」

D E D「役目？何かな、それは。」

K剣「とぼけるなー！」

AギトS「（ニローニと笑っている）」

5 5 5 A「おい、どういうことだ？ティケイドは死んだのかよ。」

カブトH「そんな訳はない。氣絶させられているだけだろう。」

龍騎S「マジかよ！じゃあ俺が倒すまでだぜ！ー！」

カブトH「まあまで。お前には無理だ。俺がやる。」

龍騎S「なんだとあ？ー！」

電王L「と、とにかくーーの状況をどうするんですか？渡さん。」

響鬼A「まあまあ。」

Kキバ「・・・ティエンド。どうこうつもりかはわかりませんが・・
・、ちゃんと話してもらいますよ？」

D E D「だったらこうするまでだよ。」

「ATTACK RIDE INVISIBLE ——」

海東は倒れている士を連れて、どこかへ消えた。

K剣「ちつー忘れていた、あのカードがあつたか！！」

Eキバ「迂闊でした。」

8人のライダーたちは変身を解く。
剣崎と渡を残し、あとの6人は『ディエンドを探しに出かけた。

夏海はわからなかつた。

なぜ『ディケイド』・門矢士・が破壊者と呼ばれているのか、士くんが悪いのか。士くんを倒さない限り本当に世界は救われないのか・・・。

夏海「あの・・・！」

剣崎「・・・光夏海・・・だつたか。」

夏海「はい。士くんがなぜ破壊者と言われてるのか教えてください。本当に士くんを倒さなければいけないんですか？！」

渡「正確には『ディケイド』ですが・・・。」

剣崎「渡、それ以上言つたらダメだ」

夏海「ど、どういうことですか！だつたら・・・『ディケイド』の存在が士くんだから・・・？だから倒されてしまふんですか・・・？」

渡「・・・『ディケイド』の存在が世界を破壊へと導いていったのです。僕たち8人の世界も『ディケイド』によつて破壊されてしまった・・・！」

夏海「・・・そんな・・・！」

渡は目の前で世界が破壊されていくのを見ていくことしかなかつた。目の前でともに戦つってきたイクサが消えた。何もできなかつた。どうしようもなかつた。

剣崎も・・・ほかのライダーたちの世界も同様に、だ。

夏海「だから『ディケイド』を・・・士くんを倒すんですね？」

渡「今はそれをするしか方法がないんです……！」

遠くのほうで究極の闇と化してしまったコウスケが叫んでいた。
必死になつて何かを探していくよつと見える。

ヒクウガ「ティケイドオオオオオオ……！」

剣崎「……渡。アレはどうする？ 自我もなにようだが……」
渡「我々のすべきことはティケイドを倒すこと。彼の目的も今の状
態であれば同じでしょう。」

剣崎「光夏海。お前の考えもわかる。仲間ならそう思つのは当然の
ことだ。だが全世界のために……わかつてくれ……！」

夏海「私には何もできない。士くんのために何かしてやることもで
きない。守ることだってできない……。」

夏海「（私はどうすれば士くんを救えるの……？）」涙を流す夏
海。

鳴滝「夏海君……。」

夏海の前に鳴滝が現れた。

夏海「……鳴滝さん……？」

鳴滝「破壊者ティケイドをとめることができるのは君だけなんだ。
夏海「……私だけ……？」

鳴滝「世界を救おう。そのためには君に真実を話さねばならない。」

夏海「……真実……？」

第一話 テイエンドヒョウ人のライダー（後書き）

第一話。いかがでしたでしょうか！

・・・なんだかよくわからない感じになつてゐるかもしないんです
けど・・・（（笑 許してください）（笑
いろいろと伏線をつけとかなければいけないので、まだまだなぞの
感じを漂わせて見ました。

次回は海東と士の2人メインでお送りします。
お楽しみに！！

すべてを破壊し、すべてをつなげ！！

第一話 海東と士（前書き）

今回は海東と士メインで動きます。
心理的描写が多めだと思われます。
会話が多い・・・です（汗）

海東「士。これからも僕のことを見ていてくれよ？」
士「・・・うるさい。」

世界の破壊者『ティケイド。

ライダー大戦の世界をめぐり、その瞳は何を見る？

第一話 海東と士

先ほどの場所から少し離れた洞窟の中に海東はいた。その場に土を寝かせると、自分自身はその傍に座った。

海東「（僕の本当の役目……か。そんなものどうに忘れたぞ。）」

ふと海東は目線を土に向けた。

海東「（僕も変わったなあ。）」

今までの自分なら仲間などといつ駢れ合にじみた関係を作ることになかった。

仲間と思つても裏切られる。結局はひとりだ。そんなふうに思つていた。

その気持ちに何らかの変化があつたのだと思つ。彼はそうなつた原因をわかつていた。

海東「……士。ちやんと借りは返したよ。」

海東がその場を離れようとするとい、小さな呻き声が聞こえた。

士「……うん……つ……」

海東「……！土……？」

士「海東……か……。」「ははじだ？」

海東「洞窟の中だ。追手はまだきていない。」

士「……な、ナツミカソ！……つ……」

海東「まだ動かないほうがいい。剣崎くんにやられた傷もまだ完治していないようだしね。ナツメロンはいないよ。だけど彼らも一応

人間だ。生身の人間を傷つけたりはしないこと。悪魔のよくなやつらばかりだけね。」

海東は何かを思い出すような表情をしてうつむいた。

士「・・・海東？お前はあいつらのこと知ってるのか？」

海東「まあね。しばらく一緒に行動をしてたこともあっただし。だけど今はしていないよ。」

士「コウスケはどうなってる？・・・まだあのままなのか？」

海東「ああ。きっとずっとあのままだと思つ。」

士「なつ・・・！――！」

海東「（『）これまで』もやうだった。アルティメットクウガになつたら・・・もう元には戻らなかつた。そしてディケイドが世界の全てを、ライダーを、自分自身をも壊して、終わり・・・。だけど本当にそれでよかったのか？結局またディケイドが生まれて、世界は滅亡に向かつている。また『あれ』を繰り返すというのか・・・。」

海東の表情が一瞬歪んだ。それを見た士はそのことには触れず、えて『いつもの士』を演じた。

士「ちつ・・・今度はおれが借りを作つたな。面倒なもんだ。」

海東「何を言つてるんだい、士。これは僕が君に作った借りを返しだだけさ。」

士「海東。ようやくいつもの顔に戻つたな。」

海東「え・・・？」

士「気づいてなかつたのか？今まで死んだような眼だつたぞ？その顔写真を撮つてネットで流してやりたかったくらいに、な。」

海東「・・・士、それだけはやめてくれ。」

士「写真すら撮つてないから安心しろよ。」

「

海東「そんなこと言つてゐる士も士だよ。ナツメロンや小野寺くんのことが気になつてしまふが、つて顔をしてるからね。」

士「べ、別に・・・危ない所に置いてきちまつたからな。ただそれだけだ！！」

海東「はいはい、わかつたよ。心配な気持ちもわかるし、今すぐにも向かいたい気持ちもわかる。だけど今の体じゃ無理だ。それに小野寺くんにはもう自我がない。今行つたら叩きのめされるだけさ。」

士「わかつてゐ・・・！」

口ではそう言つてゐる士だが、顔には『今すぐにでも向かいたい！』と書いてある。それだけは避けなければならなかつた。これから闘うであるひづ人のライダーとコウスケと・・・。

士「・・・お前らしくないな。」

海東「何がだい？」

士「そんな辛氣臭い顔をいやがつて。何を考えてる？それにおれを助けたり。何がしたいんだ？何のために？」

海東「士自身がお宝だからさ。お宝を求めるのが僕の本性だひ？」

海東は氣付いた。士が泣きそうになつてゐること。

海東「士もらしくないな。泣いてるのかい？」

士「泣いてない。・・・お前は他の宝を探してくれ」

海東「・・・何を言つてゐるんだい？」

士「お前は俺を仲間と言つたな？だが仲間つて言葉はお前が一番嫌いな言葉のはずだ。なぜ使つた？」

海東「・・・なぜだひづね。僕自身わからぬよ。」

士「だつたらもひづね。俺のことは忘れる。この世界から出でつけ。」

海東「…酷いな。せっかく助けてあげたのに。」

士「それは…感謝してる。でももう俺と関わるな。俺と関われば…死ぬかもしれないんだぞ？俺が…俺が破壊者である限り…俺は海東とは闘いたくない。」

『破壊者』。

この言葉はもともとそんなに強くない士の心を傷つけてきた。

「それがディケイドの宿命。ディケイドの役目。」そう言ってしまえば早いのかもしれない。

だけど海東は言えなかつた。目の前の、今にも崩れ落ちそうな人間の前では絶対に。

海東「忘れたのかい？僕は士の邪魔をするつて。」

士「海東…ふざけるな…何処行くんだ…！」

海東「（ああ、やっぱり僕は変わつた。少し前の僕はこんなにも人と関わることなんてなかつたのに…。だけど今の僕は…。）

「

海東「ちょっとこのあたりを散策してくるよ。士はここで待ついてくれたまえ」

士「…」

海東「（今の僕は士のためならどんなことでもする…。そんなふうに思つてゐようつだ。…僕の質が下がつたのかな。）」

海東が士から少し離れた場所で突然足をとめた。

海東「鳴滝さん。あなたのいいなりにはならないよ。あの時の惨劇をまた起こすわけにはいかないんだ。…そろそろ絞めとかない

といけないね、君のその計画を。それが僕の役目さー。」

To be continue...

第一話 海東と士（後書き）

ちょっと長くなってしまった。

そしてわかりにくいです（爆

うーん…士と海東との絡みが本編では隨所随所あつたんですけど、そこまで深くは掘り下げてくれなかつたんですよね。だから結局のところ、海東がなぜ士のことを突然「仲間」と言い出したのかわからんんですね（笑）だけど、無理やりここではあてはめてみました。やっぱり日本語がおかしいですね、ごめんなさい。もっと精進します！

感想・評価などどうぞお願いします！

全てを破壊し、全てを繋げ！！

第三話 本当の破壊者・・・？（前書き）

今日はコクウガVSティエンドの闘いシーンがあります！

戦闘シーンの描写はほんとに苦手なので、目をつぶっていていただけすると嬉しいです（（笑 あとは、鳴滝とキバーラが夏海に本当のこと（？）を話す場面です。

士は登場しません。すみません（（笑

世界の破壊者ティケイド。

ライダー大戦の世界をめぐり、その瞳は何を見る？

第二話 本当の破壊者・・・?

ヒクウガ「ウオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!

小野寺ユウスケ だつたもの は、ただひたすら走っていた。
何かを求めて・・・何かを探して・・・ただひたすら。

ヒクウガ「ディケイドオオオオオオオオオ!

今、彼に『世界の破壊者・ディケイド』を倒すことしか頭にない。
これまで、一緒に旅をしてきたこの記憶がないからだ。

ヒクウガ「・・・どじだ・・・ディケイドオオオオオオオオ!

ヒクウガは変身をいきなりといた。

闇ユウスケ「・・・士。お前は俺が倒してやる。世界は俺のものだ

！」

ひとつ叫ぶとまた変身をして走り出した。

夏海は鳴滝とキバーラから本当の話をすると言われ、とある場所まで連れてこられていた。

夏海「…………」

鳴滝「……ネガの世界だ。」

夏海「……ネガの世界……？」

夏海は戸惑った。

この世界は確かに人間がいてはいけない世界なのでは？と。

キバーラ「安心して、夏海ちゃん。彼らはここにはいないわー。かわりにこの子がいるの。」

夏海「…………あ、あなたは…………」

? ? 「…………久しぶりですね。」

ネガの世界で出会った、自分と同じ顔を持つ女性。（通称「ネガ夏海」と呼ばせていただく）
ぼろぼろの服に、ライフル銃を持っていた。

夏海「…………どうしてあなたがここに？」

ネガ夏海「…………ディケイドを倒すためです。」

夏海「そ、そんな…………なぜあなたがそんなことを？」

鳴滝「ディケイドを倒さなければ、全ての世界が破壊されるからだ

！」

夏海「…………本当のこつて……結局いつものことじゃないですか……。」

キバーラ「違うのよ、夏海ちゃん。」

キバーラが普段よりトーンを落として夏海に話しかける。

夏海は顔をこわばらせた。

キバーラ「ディケイドを止められるのはあなた達しかいない……。」

「ディケイドがいる」とですべてのライダー、いや、全ての人間が消えてしまうのよ。」

夏海「すべての人間が・・・？」

鳴滝「そうだ。人間は勿論、世界そのものが消える…仲間も・・・町も・・・すべて、だ。」

ネガ夏海「今はこんな世界になつてしましましたけど、やつぱりここは私の世界です。私は世界を守りたい。だから・・・私がディケイドを倒す！！」

ネガ夏海の決心は固かつた。夏海のように揺らがない。もう覚悟を決めているのだ。

鳴滝「夏海くん。世界を救いたいとは思わないのか？・・・君の力ですべての世界が、全ての人間が救われるのだ！」

夏海「（・・・でも・・・）士くんを倒すだなんて・・・（やつぱり私はできません！士くんを倒すことも・・・士くんのことを破壊者だつて思うことも・・・ちゃんととした理由を聞かない限り納得できません。」

鳴滝「・・・いいだろう。理由はちゃんとあるからな。」
夏海「・・・教えてください。」

海東の目の前には小野寺ユウスケが立っていた。

殺氣立っているユウスケに対し、海東は普段通りだった。

海東「やあ、究極の闇くん。何をそんなに殺氣立っているんだい？」

闇ユウスケ「つるやこ。そこを避け！俺が世界をもじり。『トイケイ

ドは俺が倒す。」

海東「ふつ。土は究極のお宝なんだ。土に触れるものは僕が許さないよ。」

闇ユウスケ「・・おとなしくすれば命だけは救つてやつたのにな。」

海東「君ごときには僕を倒すことはできないわ。」

闇ユウスケ「それはどうだらうな。今のおれは最強だ！お前なんだ痛くもかゆくない。・・変身。」

ユウスケはロクウガに変身した。

海東「・・・やつぱらうなるのか。しちうがない。」

「KAMEN RIDER—！」 海東「変身ー！」 「DE、END
！」

DED「じゃあまことにちからこぐべー。」

「KAMEN RIDER OHJA！ IXA！」

王蛇「祭りの場所はここか？」「イクサ」「その命、神に返しなさいー。」

DED「それじゃ、いつておいで」

ロクウガ「俺相手に2体で足りるのか？海東。ウオオー！」

ロクウガは思いつきり走り出ると、王蛇のボディへと駆け寄りパンチをくらわせた。

王蛇「グアアア・・・！」

するとどうだらう。一瞬のうちに王蛇が倒されてしまったではない

か。

DED「（・・・あの王蛇を一発で・・?どんな力を秘めているんだ?）」

?「俺、ここから抜けるわ。なんかめんじくさくなつてきたぜ」
??「ほんと乾さん、素直じゃないんだから。あ、僕たち門矢さんが『本当の破壊者』とは思えないんですよ。なので別行動させてもらいます。」

一触即発

剣崎「お前ら・・・何言つてんだ?!!『ディケイドを倒さなければ俺らの世界は救われないんだぞ?!!」

?「剣崎。一度消滅した世界をなぜ元通りに出来るんだ?そこから間違ってるんだ、お前は。・・・バカだからしようがないのか。」

剣崎「なんだと?!!乾、もう一回言つてみろ!!」

乾「何度も言つてやるよ。バカだつてな。」

?「・・・渡さん。」

渡「剣崎さんも乾さんもやめてください!今は喧嘩をしている場合ではありません。仲間割れしている余裕もないんです。一刻も早くディケイドを見つけ出して、倒さなければいけないんです。」

ここはライダー8人が集まる場所。

今はこれからのことを見計りしていた。

だが、いきなり乾巧(仮面ライダー555に変身するもの)と津上翔一(仮面ライダーアギトに変身するもの)が抜ける、と言いつ出し

たのだ。

剣崎「『本当の破壊者』……だと? どうことなんだ、津上。」
津上「それを教えるわけにはいきませんよ。だってそれを教えたら
今の剣崎さんに気の毒ですしね。」

剣崎「なんだつて? !」

?? ? 「まあまあそのくらいにしといたら? 抜けたい奴は抜ければ
いい。それでいいじゃないの?」

剣崎「ヒビキさんがでてくるとめんどくさいなるので、出でこない
でくださいよ」

ヒビキ「ひどいなあ・・・ハハハ」

? ? ? 「本当の破壊者であれ、ディケイドを倒さなければ全世界が消
滅される。世界の中心にいる俺がそんなことはさせない。俺がディ
ケイドを倒す。」

? ? ? 「お前、やっぱりむかつくやーーその言い方やめろよなーー。」

8人ライダー側にもいろいろいるようだ。

とにかくディケイドを倒すべきだ、と主張するもの。
まずは傍観が一番だ、と考えているもの。

「本当の破壊者」を見つけるべきだ、と主張するもの・・・。

乾「お前ら、もうこいつペん考え方直した方がいいぞ。ディケイドが正
気を失う前にな・・・」

鳴滝「今のティケイドライバーには制御装置がある。」

夏海「え？」

鳴滝「破壊者としての活動を抑えるための、だ。」

夏海「……じゃあそれがあるから今は大丈夫ってことなんですか？」

キバーラ「……もう壊れてるのよ。」

夏海「……そんな……！」

じゃあ……もう手遅れってことなんですか……？

鳴滝「……夏海くん。やつてくれるね？」

夏海「……私は……」

To be Continue...

第三話 本当の破壊者・・・？（後書き）

文章が・・・おかしい！！（爆

それも全然戦闘シーンがなくてすみませんでしたへへ；

次回はたくさんでてきますし、ちゃんと土も登場させますー。

・・・「本当の破壊者」とはなんのことなんでしょうか？

次回をお楽しみに！

全てを破壊し、全てを繋げ！

第四話 小野寺コウスケ（前書き）

とうとう始まつたシクウガバディエンド。
王蛇を拳一発で消滅させたシクウガを見て、冷や汗をかく海東。
はたして戦いの行方はいかに？！

世界の破壊者ディケイド。
ライダー大戦の世界をめぐり、その瞳は何を見る？

第四話 小野寺コウスケ

海東は田の前のヒクウガに首を絞められていた。

イクサも消滅に追い込まれ、ディエンドが気を休めているほんの一瞬のうちに、ヒクウガは彼に向って突撃してきた。海東はよけることも攻撃を仕掛けることもできなかつた。その間にディエンドライバーまで奪われてしまつたのだ。

DED「ぐう！・・・・・つあ！・・・」

ヒクウガ「ウアアアアアアアアアアアアアアアア！」

ディエンドは変身を解除され、その場に倒れこんだ。

海東「（・・・・くそ・・・・潮時なのか・・・・僕の旅は・・・・）」

コウスケは深い闇の中で目が覚めた。

コウスケ「ここはどこだろ？・・・・」

自分はアポロガイストの攻撃を浴び、死んだはずだった。

コウスケ「そつか。ここは地獄なのか・・・俺、天国には行けなかつたんだなあ・・・ハハハ！」

開き直つたように見えるが、田にはうつすりと涙を浮かべてゐる。

ユウスケ「俺・・・ちゃんと土を守れたんだよな。だつたら地獄でも・・・いいよな！」

ふと視線を落とすと、自分の掌が真っ赤に染まっていた。

ユウスケ「な、なんだよこれ！！なんで・・・なんで真っ赤に染まってるんだよ・・・俺・・・誰かをまた倒してしまったのか・・・？また・・・また笑顔を守れなかつたのか・・・？土を守れた氣でいたのは・・・間違つてたつてことなのか・・・？・・・俺・・・これからどうすればいいんだよ・・・グスツ・・・！」

？？「泣かないでください。あなたに涙は似合いませんよ」

ユウスケ「・・・だ、誰ですか？」

？？「名乗る者でもありませんよ。2009個の技をもつもの、つてことにしておきましょうか。ハハハ！」

目の前の男は笑っている。ユウスケはその笑顔にくぎ付けになつていた。

？？「僕もね、今の君みたいな時があつたんです。一生笑顔を取り戻せなくなるような出来事があつて・・・自分の掌は真っ赤だし・・・それをちゃんと元の自分に戻すために旅をまた再開したんです。何年もたつた後ちゃんと元に戻りました。・・・でも。小野寺さんはすぐにでも戻つてもらわなければいけないとと思うんですよ。」
ユウスケ「・・・な、なんで・・・なんで何も知らないあんたに言わなければならないんだ！！そんなこと・・・そんなこと言われたつて何の慰めにもならないし、・・・俺はもう・・・」
？？「单刀直入に言います。あなたの仲間である門矢士さんが危険です。」

ユウスケ「・・・え・・・」

？？「・・・あなたの役目を思い出してください。」

ユウスケ「俺の役目・・・？」

八代「世界中の人の笑顔のためだつたら、あなたはもっと強くなれる。」

士「こいつが人の笑顔を守るなら、俺はこいつの笑顔を守る！…」

ユウスケ「俺の役目は・・・俺のすべき」とは・・・世界中の人の笑顔を守ることだ・・・」

ユウスケがそういうと、目の前にいる男性はほほ笑んだ。

？？「なら大丈夫！この真っ赤な掌だつてすぐに元通りになります！門矢士さんの笑顔を守つてあげてください。」

ユウスケ「・・・本当にこんな俺でも・・・士の笑顔を守れるのかな・・・」

？？「大丈夫ですつて！俺が大丈夫つて言つてるんだから、俺と同じ君ならなおさら！…」

ユウスケ「・・・同じ・・・？それつてどういう・・・」

？？「時間がありません。今すぐここから抜け出しましょう。」

ユウスケ「・・・はい。」

ユウスケが目を覚ますと、目の前に血まみれの海東が倒れていた。

ユウスケ「・・・まさか俺は海東を・・・？」

海東「・・・ようやく正気に戻ったか、小野寺くん・・・」

ユウスケ「・・・俺は・・・一体何を・・・！」

海東「・・・僕のことは気にするな。君は今まで自我がなかつたんだ。仕方ないわ。弱い僕が悪い。」

ユウスケ「何言つてんだ！はやく・・・はやく病院へ！！！」

海東「僕のことは気にするなと言つてゐるだろ？！・・・はやく土のもとへいってやつてくれないか。今の君ならきっと倒せるはずさ。」

「
ユウスケ「何バカなこと言つてるんだよ・・・海東を置いてなんて・
・そんなの無理だ！！それに何を倒すんだよ・・・意味わかんな
いよ！！」

海東「・・・僕はもうここで君たちの邪魔をして行へのをやめる
よ。そろそろ違う旅もしたくなつたしね。」

ユウスケの目の前にオーロラが現れた。

ユウスケ「・・・海東。士は俺が守る。だからはやく追いつこう
いよ！」

ユウスケが走り出し、その場には海東だけが残つた。
砂浜をふらふらと歩く海東。

海東「・・・鳴滝さん。あなたの思い通りにはいかないよつだ。」

その場に崩れる海東・・・。

海東「…………死ぬな…………」

士は乾と津上に出てかわしていた。

士「……お前ら。ライダーだろ。」

津上「はー。僕がアギトで乾さんが555です。」

士「・・俺を倒しに来たのか・・・それなら受け立つぜ。」

津上「乾さんは無愛想ですからねー、勘違こされやすいくんですよー。」

乾「お前はへりへりしそぎなんだよ。」

士「・・・じやあ何しに来たんだよ、お前ら。」

津上「士さんの傷を治しにきました!」

士「・・・何言つてんだよ。お前らは俺の敵じゃないのか?」

乾「お前に話しておきたいことがある。」

士「話しておきたいこと?なんだそれは。」

津上「『本当の破壊者』のことです。」

士「本当の破壊者だと?..?」

To be continue...

第四話 小野寺コウスケ（後書き）

次回は土に本当の破壊者の情報が話されます！
鳴滝とキバラの目的も明らかに・・・??

お楽しみに！！

全てを破壊し、全てを繋げ！！

第五話 鳴滝の正体（前書き）

最近お気に入り数が増えて、若干浮かれ気味の水城ですが、もっといいものが書けるよう、日々精進していきたいと思っております。これからもよろしくお願ひいたします！！

世界の破壊者『ディケイド』。

ライダー大戦の世界をめぐり、その瞳は何を見る？

第五話 鳴滝の正体

話は門矢士が旅を始める口より前にさかのぼる。

世界はやはり終結を迎えていた。

だが、それを自分の命と引き換えに破壊した人物がいた。

それが、「本当の破壊者」ディケイドである。

そのディケイドはただ世界を救いたいという想い一心でライダーを破壊した。

その方法が正しかったのか、今となつてはわからない。

彼は自分の命を投げ出してまでも、救いたかったのだ。世界を、仮面ライダーを、仲間を。

だが、結局その想いもむなしく世界は破壊された。彼の仲間もほとんどが巻き込まれ死んでいった。

最後まで自分を信じてくれた・・・『夏海』も・・・。

士「待て、ナツミカンがなんでここで出でくるんだ?」

乾「もう少し話を聞けよ。」

士「いや、教えてくれ。なぜここで夏海が出てくるんだ。」

津上「・・・あなたの知っている夏海さんでもあり、知らない夏海さんもある、ということです。」

士「・・・意味がわからねえ・・・。」

乾「話をつづけるが。」

そいつは今でも恨んでいる。世界の破壊者ディケイドを。ディケイドという存在を。

仲間を失い、自分自身も失った。今の彼に残っているものは何もな

い。ただ『ディケイド』を倒すこと、それだけを求めている。それが今
の彼の・・・役目だ。

今、俺達8人のライダーは今の『ディケイド』を倒そうとしている。ま
だ「破壊者」として目覚めていないうちに倒しておこうっていう魂
胆らしい。

・・・だが、俺はそれが正しいと思えないんだ。同じライダーをこ
んな簡単に倒していいのか、そんなの考えたって答えなんかでない
んだけどな。

だから俺ら2人はそこから抜けてきた。お前に「本当の破壊者」を
倒してもらうために・・・いろいろ情報も持ってきた。俺らだけじ
や物足りねえかもしだねえが、我慢してくれ。

津上「乾さん、今日は素直にいろいろ話してるんですね。」

乾「うるさい。今はこいつにわかつてもらうのが先決だろうが！」
士「・・・お前らが敵ではないことはわかった。だが、その『本当
の破壊者』って誰なんだ？お前らは知ってるんだろう？」

乾「ああ。そいつはお前もよく知ってるやつだよ。今の姿を見てい
たら全然そんな感じがしないかもしれないがな。」

士「・・・大体わかった。」

鳴滝は汚れたカメラを取り出した。

鳴滝「・・・懐かしいな。」

ボソッと呟く鳴滝の前に現れるキバーラ。

キバーラはそんな鳴滝を見て、クスッと笑うと鳴滝に近付いていっ

た。

キバーラ「鳴滝さん? そのカメラはもう封印したはずじゃなかつたかしら?」

鳴滝「キ、キバーラ! ! ! !」

キバーラ「あなたがまだ”生きていた頃”のことを思い出すことがあるのは知っていたわ。」

鳴滝「ふつ。私もまだまだだ、ということだ。」

キバーラ「……夏海ちゃんのこと、後悔しないの?」

鳴滝「……何を言つてごる。ディケイドをとめることができるのは彼女だけだ。」

キバーラ「だつて……あなた……」

鳴滝「キバーラ。私に昔のことをそんなに思い出させたいのか……」

キバーラ「『めんなれ~い』。」

反省の色がないキバーラを見てイラつかせる鳴滝。

オーロラの向こうには乾と津上が土と接触しているところが見えていた。

鳴滝「……ディケイド。お前は倒されなければならんのだ。それが……世界を救つたひとつ的方法なんだ……！」

キバーラ「じゃあ、アタシは夏海ちゃんの所へ行くわよ? 鳴滝さんもまたあとでね」

鳴滝「……ああ。」

夏海は走っていた。

勿論目的を果たすためだ。

夏海（はやくしない）と、ディケイドが世界を破壊してしまつた（一）

夏海自身、まだ迷っていた。

本当に土を倒すべきなのか。
そんな質問に答えられる人なんていな
いだろう。

「ティケイトが破壊者である」とは重々わかる。しかし、なぜか士くんを破壊者と呼ぶのに憚っていたのだ。

すると夏海の目の前にティケイドとコクウガの戦闘が見えていた。

夏海は夢で見たような場面を現実で見てしまった。

大きな爆発が起つて、夏海はその場にしゃがみこんだ。爆発があまり恐い恐い田を開けると、手をはらつてイケイドのみが立つていた。

夏海「…………ティケイド。」

彼女の瞳は何かを決心したような視線をディケイドに送っていた。
それにディケイドは気付かない。

夏海「デイケイドは私が倒す。」

ユウスケは土と夏海を探していた。

ユウスケ「……土……夏海ちゃん……ビニだよ……」
愛用のバイクに乗り、2人を探しているといきなり人影が見えた。

ユウスケ「うわ……おい……危ないじゃないか……」
剣崎「……正気に戻つたってのは本当だつたようだな。仮面ライダークウガ。」

ユウスケ「……お前は……剣崎一真…………」

ユウスケは剣崎をにらんでいる。

剣崎はその視線をニヤッと笑いながらうけとめていた。

剣崎「……ディケイドの肩をもつものは、倒すのみ。」
ユウスケ「……俺だって。お前を倒してやる……変身…………」

ユウスケは赤い眼をしたヒクウガに変身した。

剣崎は仮面ライダーブレイドキングフォームへと変身した。

ここに、仮面ライダークウガVS仮面ライダーブレイドの戦いが幕を開ける！！

To be continue..

第五話 鳴滝の正体（後書き）

鳴滝の正体はわかりましたかね？

これからもつともつとわかりやすくなつてくると思われます。

次回は主にコウスケVS剣崎になります！！

全てを破壊し、全てを繋げ！！

第六話 パラレルワールドと原典世界（前書き）

鳴滝の素性が少しずつ明らかになつていて、この内容。ただ、この内容は今後の展開に必要なので、いれてみました。主はユウスケＶＳ剣崎一真だつたりしますが・・・。ヒクウガＶＳＫ剣の戦い・・・どうなるのか、自分でも楽しみです（爆 まあ大方予想はつきますよね。

世界の破壊者ディケイド。
ライダー大戦の世界をめぐり、その瞳は何を見る？

第六話 パラレルワールドと原典世界

お前のよく知る光夏海という女は、以前のライダー大戦のときにも存在している。お前が知っている姿のままだ。だが同じ人間ではないことは確かなんだ。だってあのとき彼女は……

士「なんだよ……ナツミカンはそのときどうなったんだ？」

乾「……ディケイドの戦いに巻き込まれて死んだ。」

士「……なんだと？」

津上「正確に言えば、ディケイドを底つて死んでいった、が正しいかもしませんね。」

士「……夏海が……。」

俺らもそのときのライダー大戦に参加している。だから……彼女を再び見たとき驚いたんだ。彼女もパラレルワールドの一員だったのか、とな。

士「パラレルワールドだと？」

乾「ああ。お前らがめぐつた世界はすべて俺らのパラレルワールドにすぎない。だから最終形態にもなれない、というわけだ。お前の仲間のライダーは俺ら、原典ライダーには敵わないというわけさ。」

津上「あなたにはコンプリートフォームになる力がありましたよね？」

士「ああ。これだろ？」

士は乾と津上に見せる。

津上「はい、それです。あなたがめぐつた世界が消滅に向かってい

る今・・・。その力が完璧に使えるとは言い切れないんです。」

士「な、なんだと？」

乾「ライダー 자체が消滅してしまったんだからな。だが・・・妙なことがある。」

士「・・・コウスケのことだろ？」

乾「ああ。あいつもパラレルワールドの人間のはずだ。だったら消滅するはずなのに・・・」

津上「小野寺さん、五代さんによつて救われてるといいんですけど・・・」

士「五代？そいつがコウスケの・・・クウガのライダーなのか？」

津上「ええ。僕たちライダーの中で一番強いんです。」

士が津上や乾と話している間、コウスケは剣崎と戦っていた。

コウスケ「（くそ、どんだけ力強いんだよ！）こんなのがくらつたら最悪だ・・・！」

K剣「よそ見していくいいのか！－ウェイ！－！」

ヒクウガ「うう！」

コウスケは剣崎の攻撃をくらい、膝をついてしまった。

K剣「究極の力と聞いていたが・・・やはりパラレルワールドの力。偽者の力は弱いな。」

ヒクウガ「偽者だと？！俺は・・・俺は本物のクウガだ！－！－！おりやあああ－！－！」

コウスケは腕に力をこめて、剣崎の腹を殴った。

K剣「うああ！！！！ちつ。なかなかいいパンチだな。だが俺には効かない」

Uクウガ「どうかな！！！きつちり士の仇、とらしてもうつせ！！！おりや！！！」

やみくもに殴っているが、攻撃はすべてかわされてしまった。

K剣「・・・そろそろ疲れてきただろ？」

Uクウガ「まだまだだつ！！！・・・ハアハア・・・！！！」

K剣「とどめだ。」

「スピードテン！ジャック！クイーン！キング！エース！ロイヤルストレートフラッシュ！？」

K剣「ハアアアアア！！ウェエイ！！！！！」

Uクウガ「（くそ、逃げ切れない！！！）」

「ドカアアアアアアアアアアン！！」

K剣「・・・？」

Uクウガ「ハアハアハアハア・・・まだ・・・まだ・・・だぜ・・・！」

K剣「あの攻撃をまともに当たったくせに・・・なんで倒れていなあんだ？」

Uクウガ「・・・俺はクウガだから・・・」

K剣「・・・、今日のところはこれで勘弁してやる。次にあつたと

きは必ず倒す。」

ヒクウガ「あ、おい！待てよ……！」

ユウスケだけ取り残された。
剣崎に対しても強気の態度をとっていたが、彼の体はもつまつまつ
だった。

ユウスケ「ハア……さすがに……きつこなあ……。」

ユウスケはそのまま倒れこみ、目を開じた……。

士「じゃあ、夏海はそのときの『ティケイド』と一緒に旅をしていったっ
てことなのか？」

津上「はい、そうです。」

士「そのときも9つの世界をめぐつて？」

乾「やつていたことはお前と同じだ。ライダーを破壊しなければな
らなかつたところを仲間にしてしまつたところもな。……当然と
いえば当然だが。」

士「……なぜだ？」

乾「……そのうちわかる。その『ティケイド』を対峙したときにな。」

士は首をかしげた。

「偶然」ではなく「当然」と言った点である。
しかし、彼らはまだそこを教えてはくれないようだった。

津上「とつあえず、僕たちは一度向こうに合流するつもりです。な

ので、土さんはここで待っていてください。」「

土「合流つて……お前ら仲違いしたんじやないのか？」

乾「俺らの立場の人間もほかにいる、ってことだよ。」

「・・・結構なこつた。向こうにいたほうが狙われなくともすむ
つていうのだ。」

士はこう言つてゐるが、内心はすぐくうれしかつた。

てこるからだ。

何より、「仲間」の大切さをこのたびで知った土は、新しい仲間ができることに多少の喜びを感じていたのだ。自分では本音を出して

津上「せんじ、うつこいつは乾かんこ似てるんですね。」

津上「いや、なんでもないです。（本人に言つたら絶対に否定され

「うなぎ」

津上「それでは、行つてきますね。しつかり体を休めてください。」

乾「お前の仲間も一応探してきてやるよ。」

津上「（やつせんじやなこなあ・・・）」「

ついで津上と乾は仲間のところへ合流するために出て行った。

士「しかし・・・本当に鳴滝がディケイドなのか?だつたらなんで
ディケイドを恨んでいるんだ?皆田見当がつかん・・・」

鳴滝「直接教えてやうつか。」

士「な、鳴滝！――――！」

鳴滝「久しぶりだな、ディケイド。お前にひとつこことを教えてやろうと思つてな。」

士「いいことだと? 断る! お前にとっての「こと」は、俺にとっては悪いことしかないからな。」

睨んでいる士を見て、ニヤッと笑つた鳴滝は奇妙なことを言い出していた。

鳴滝「確かに私はディケイドだった。それは正しい。そして今でも私はディケイドを恨み続けている。それも変わらない。だが、お前らには決定的な勘違いがひとつだけある。」

士「勘違い……だと?」

鳴滝「私はディケイドとして……本当の破壊者『ディケイドを倒す。それが私の目的なのだ。』」

士「……何言つてんだ?」

鳴滝「……本当の破壊者は……お前だ。」

鳴滝は士に向かつて指を指した。

士は鳴滝が言つたことに對して動搖を隠せない。

士「何を言つてる……?」

鳴滝「お前は……私だ。」

士「……なんだ? どうして? じだーーちやんと説明しやがれ! ! !

鳴滝「とうとう私の正体を明かすときが来たよつだ。」

鳴滝は士が持つてゐるカメラと同じものをとつだし、自分の腰近くへと持つていく。

するどうだらう。

カメラだつたものが、ディケイドライバーと類似するものに変わつ

たではないか。

士「……どうこう」とだ・・・?お前・・・!――!」

田の前にいた鳴滝は・・・士をつくりの姿へと変貌していた・・・

鳴滝ver.士(ニ士)「・・・変身。」

「カメンライド・ファイナルディケイド!」

To be continue...

第六話 パラレルワールドと原典世界（後書き）

こんな序盤に彼の姿をさらけ出していいのか…って心配になつた方もいるかもしないんですけど、あくまでも序盤なので。Ζ士はもうすこしく強いです。とりあえず今の土には敵いつこないほど強いです。

ちょっとだけΖ士の「ディケイド」の説明をさせていただきますと、

仮面ライダーファイナル「ディケイド・鳴滝ver.」の土が変身した姿。

カメンライドしなくともほかのライダーの技を使つことができ、「ディケイド」激情態の3倍もの力を發揮。「ディケイド」の最終形態である。

こんな感じでいきます。設定変更があったらそのつどお話しします。

全てを破壊し、全てを繋げ…！

第七話 テイケイドVSファイナルティケイド（前書き）

- ・士はまだ完全に傷は癒えていません。
- ・士は他のライダーに変身することができません（クウガ以外）。
- ・とりあえず鳴滝ver.士（N士・F D C Dと表記）は最強。
- ・N士の攻撃はカタカナ表記、士の攻撃は英語表記

世界の破壊者テイケイド。

ライダー大戦の世界をめぐり、その瞳は何を見る？

第七話 デイケイドＶＳファイナルデイケイド

ディケイドとFディケイドの闘いが始まっていた。

F D C D 「今のお前に戦う力はない。」

「どうして？」

アボロ・カリトを見ればわかるぜ

士は啞然とした。

だ。 ディケイドのカードとクガのカード以外が使えなくなっているの

• ?

「FDCD」その通り。だからお前は俺に勝つことはできない。

ディケイドとクウガのカードしかない士にとつて、闘いを長引かせるのは危険。

何のカードを持つているかわからないうちは、様子を見るにした。

・・・のだが、N士の動きは余りにも速かつた。

「FDUD 「ディケイド。お前はここで終わりだ。」

「ファイナルフォームライド ブレイド！」

卷之三

F D C D 「これがファイナルディケイドの力だ。」 ハアアアアアア

! ! !

「ファイナルアタックライド、ブレイド……」

Ζ士はディケイドにむかって走ってきていた。
士は必死に防御策を探すが、なかなかでてこない。

D C D 「ちつ……」

「ATTACK RIDE BLAST……」

F D C D 「そんな攻撃、無駄だあ……」

ディケイドはまともにファイナルディケイドの攻撃を受けてしまつ。その攻撃をもろに受けたディケイドは、体ごと跳ね返されてしまつた。

D C D 「ぐうあああ……」

体中が痛む。立ち上がるつとするが、立ち上がれない。
自分の攻撃が効かない。彼は自分だと言つた。その言葉が頭から離れない。

士は焦つていた。それと同時に動搖していた。

Ζ士に迷いなどない。本気で士を倒そうとしている。

士「（俺は……弱い。）

先ほどの闘いで負つた、ディケイドの古傷に氣づいたファイナルディケイドは、仮面の中でニヤッと笑つた。未だにうまく立ち上がりない士を見て、またにやりと笑つ。

F D C D 「……もう終わりなのか？はやいな。」

「うつ……まだ……まだ……うつ……」

F D C D 「何を焦つてる？お前は……ただ田の前の敵を破壊すればいいだけだ。それがお前の役目だ。お前は『破壊者』なんだぞ……？」

D C D 「俺は……『破壊者』……。」

F D C D 「ううだ。本氣で来い。本氣で来てこそ本当の闘いといつものだ。」

「ファイナルフォームライド レビキュー！」

ファイナルティケイドはビビキアカネタカにつかり、空へ飛び立つた。

D C D 「そんなのありかよ……うつ……」

「KAMEN RIDE KUUGA」「FORM RIDE KUUGA - PEGASASS」
F D C D 「うれで終わるにしてやる！」

「ファイナルフォームライド ファイズ！」
「ファイナルアタックライド ファイズ！」

「FINAL ATTACK RIDE KUUGA！」

ファイナルティケイドはティケイドの攻撃を軽々とよけると、ティケイドに攻撃をくらわした。

ディケイドは攻撃をくらい、吹っ飛んだ。
そのまま崖から落ちて行つた・・・。

「……これで俺の役目も終わる。」

剣崎
・・・久しぶりだな、
ファイナルD。

「お前が果たせねばならぬ」とは、俺が果たしてやつたぞ。感謝しな。」

金崎 門矢 俺はまだわからなくなつた。 てきでいるんだ。

剣崎「お前を倒すべきだつたのか、とな。」

渡が土を探していると、誰かが倒れている姿が見えた。

渡「・・・あれはまさか。・・・土さん・・・」

体中ぼろぼろで息も絶え絶えしかつた。

渡「一体誰が・・・?・・・まさか。『あの人』が復活したということ・・・ですか・・・。」
キバット「渡、どうするんだ? こいつだつて『テイケイド』なんだろ? 放置するつもりか?」「

渡「・・・キバット。今まで僕がしてきたことは間違っていたんだろうか。」

キバット「渡・・・」

渡「とりあえず、士さんを城へ運ぶ。そこから・・・考えるよ。」
キバット「・・・一人で運べるのか？渡は細いからなあ・・・。」

渡が士の体に触れた瞬間、士が一つ、言葉を発した。

士「・・・な、夏海・・・」

To be Continue...

第七話 テイケイドVSファイナルティケイド（後書き）

あれ、全然戦闘シーンがない（汗
戦闘シーンの書き方がわかりません。ぜひアドバイスをお願いします^_^；

次回は土は空氣です。

全てを破壊し、全てを繋げ！！

第八話 夏海の『夢』のつながり（前書き）

- ・土は空氣
- ・原点世界のライダーメインな感じ
- ・ヒビキは安定剤
- ・良太郎は剣崎のおもちゃ
- ・夏海が久々に田立ちます。

世界の破壊者『ティケイド』。

ライダー大戦の世界をめぐり、その瞳は何を見る？

第八話 夏海の『夢』のつながり

剣崎は苛々していた。

先ほどどのN士の言葉を思い出していたからだ。

N士『本当の破壊者は俺じゃない。そして奴でもない。』

剣崎『なに？！だったら誰なんだ！！』

N士『まあ、そう焦るなよ。奴の制御装置は破壊されているのは本当だ。だが、破壊者は別にいる。俺を倒すのはおかしな話だぜ？』

剣崎『お前はいつまでその姿でいられるんだ？』

N士『そうだな・・・もつて1週間ってどこか。』

剣崎『・・・じゃあ。その破壊者とは誰なんだ？』

N士『・・・それはまだ教えられない。すまん。』

彼の言葉がすべて正しいとは言えないかもしれないが、今はそれを信じるしかない。それはわかっている。それでも剣崎は苛々を隠せなかつた。そのせいで先ほど野上にやつあたりをしてしまつた。・・・
・大人げない。（当の本人には笑つて「そういう役回りですから」と言われてしまつた。）

剣崎「ああ！くそ！――」

天道「何を苛々しているんだ？」

剣崎「天道か。いや、なんでもない。」

天道「そういえば・・・紅がティケイドを連れて城に戻つてきたぞ。どうしたことなんだ？」

剣崎「なんだつて？！（ファイナルロゴがやつたつてことか？）どこにいる？！」

天道「そこまではわからない。あと津上と乾もいたぞ。結局は戻つ

てきたというわけだ。」

剣崎「……ちつ。」

剣崎の苛々はまだ続きそうだ。

津上「士さん、結局その場を離れたつてことですかあ……。渡さん、士さんの容体は？」

渡「心底いいとは言えません。ただ命に別条はないみたいですが……。」

乾「鳴滝。行動が早いな。」

津上「そのようですね。」

渡は疑問を抱いていた。なぜ離れたこの二人がまた戻つてきているのか。

渡「そういうえば。なぜあなたたちがここに？」

乾「戦況が変わってきている。それを伝えに来ただけだ。」

渡「戦況が？それってどういう……？」

剣崎「渡！！！」

剣崎がすごい剣幕で部屋に入ってきた。その後ろからは、その足音で何事かと思ったのか、野上とヒビキと城戸もいた。天道はゆっくりと近づいてきている。

剣崎「お前、なんでディケイドをここに連れてきたんだ！」

渡「一刻を争う状態の人間を見たとき、あなたは放置することができるんですか？」

剣崎「相手を考えろ！相手はディケイドだぞ……。」

渡「・・・でも。そのまま放置することなんて僕にはできません。」

ヒビキ「剣崎くん。」

ヒビキが突然言葉を発した瞬間、ここにいた全員がヒビキに視線を移した。

ヒビキ「青年の気持ちもわかるけど、とりあえず手当だけはさせてあげよ。うつよ。ね？」

野上「ほ、僕もそう思ってます。すここ怪我をしてるみたいだし・・・。」

剣崎「ちつ。勝手にしろよー。」

剣崎は部屋を出て行ってしまった。

それについていこうとする津上がぽつんとつぶやいた。

津上「剣崎さん。昔はこんな気性の激しい人じゃなかつたのに。」

そのまま津上は剣崎を追つて、部屋を出て行った。

城戸「もつと話しあわかつたよな！最近は『ディケイド』『ディケイド』って耳の上にたんこぶができるくらい聞かされてるしなあ・・・。」

天道「『ディケイド』を倒さなければいけないことは確かだ。」

城戸「お前が入ってくると面倒だから、いちいち入つてくんないよ！」

天道「いちいちつつかかるのはお前だが？」

城戸「なんだとか？！？」

周りはまた始まった、といづような目で一人から視線を流した。

渡「そういえば、津上さんと乾さんはなぜいりへ？」

乾「実は妙な噂を聞いたんだ。」

野上「妙な噂？」

乾「ああ。鳴滝とキバーラが光夏海に何か余計なことを吹き込んだらしい。」

ヒビキ「余計なこと？」

乾「風の噂だから正しいかどうかはわからないけどな。」

渡は少し考え込むと、乾に向かって話しだした。

渡「そうですか・・・。それとひとつ尋ねたいことがあります。いいですか？」

乾「俺が答えられる」とならな。」

渡「一人きりで話したいんです。」

ヒビキ「また俺らに隠し事ー？そろそろおじさんにも話してよ、渡くん！」

渡「すみません。ヒビキさん。ちゃんとした答えがわかり次第話しますから。」

渡と乾が部屋を出て行つた。

城戸と天道の言い争いは終了したようだ。（最も城戸が天道に勝つことはまずないので、城戸が放棄したのだろう）

部屋には重苦しい空気が流れていった。

夏海「またあの夢。最近よく見る気が・・・。どうして？」

夏海はまたあの夢を見た。

ライダー大戦の夢。最終的にディケイドだけ勝ち残るあの夢。

夏海「私はディケイドを倒す。なの。」

肝心の士が見つからないのだ。
そしてコウスケや海東までも。

夏海「ここは元いた世界じゃないんでしょうか・・・。」

すると後方で大きな爆発音が聞こえた。
その方向に夏海が視線を移すと、愕然とした。

夏海「・・・ライダー大戦。」

数多くのライダーが一方向の攻撃によつて吹き飛んでいく。
その視線の先には・・・

ナツミ「・・・ディケイド。」

夏海「え・・・？」

夏海の目の前には、『夏海』が薄汚れた白いドレスを着て立つていた。

夏海「どうして私が？・・・なんで？」

その『夏海』は夏海が後ろにいることに気づいていないようだ。
いや、気づいていないのではない。『夏海』にはそこには何もない
ように映っているからなのである。

そつ。これはまだ夏海の夢の世界。そして夏海が昔経験したライダ
一大戦の世界。

鳴滝「夏海くん。」

夏海「鳴滝さん？！これは・・・これは一体・・・？」

鳴滝「彼女は君であつて君ではない。だがこれは君が経験したもの
であることに間違いないんだ。」

夏海「そんな・・・でも私にそんな記憶は・・・！」

鳴滝「君がよく見る夢がその記憶だ。」

夏海「・・・？」

鳴滝「さあ夏海くん。ディケイドを止めてくれ。」

夏海「この世界の『ディケイドを・・・ですか？』

鳴滝「いや。この世界の『ディケイド』はもういらない。そしてこの世界
の『夏海くん』もまたいない。君がよく知る『ディケイド』を、だよ。」

夏海「わかりました。私がディケイドを・・・士くんをとめてみせ
ます。またこんなこと起きてほしくありません・・・！」

「二十・・・これでいい。これで奴が俺と同じ思いをしなくても済
む・・・。それで・・・。」

To
be
con-
tinue
:

第八話 夏海の『夢』のつながり（後書き）

第八話。いかがでしたでしょうか？

まだまだ伏線。そして主人公が空氣！

こんな扱いしていたら士に怒られますね・・・

海東「士はまだ目立つてゐるからいいよ。僕なんてすぐ倒されたんだからね。君にはもう興味はない。」

水城「あ、大樹！！！いやあ、君にはそうしてもらわないと次に進めないんだよ・・・」

ユウスケ「俺なんて海東を…この手で…」

水城「それは設定上仕方ない。あの偽予告を作った、プロデューサーを恨みなさい！」

剣崎「俺のキャラってこんな感じだつたつけ？！」

水城「ディケイド本編をもう一度見返せ、

良太郎をおもちゃにしやがつた奴め」

剣崎「俺の扱い酷くね？！」

とことことで、次回お会いしましょうー（逃）

士「俺も出せーーー！」

全てを破壊し、全てを繋げ！

第九話 乾と渡、そして夏海と剣崎（前書き）

- ・ 夏海が動き始めます
- ・ 士、目覚める
- ・ 乾と渡の会話

世界の破壊者ディケイド。

ライダー大戦の世界をめぐり、その瞳は何を見る？

第九話 乾と渡、そして夏海と剣崎

キバーラは当初夏海を利用しようとしていた。夏海の心身を乗っ取り、自分の思い通りに事を進めよう。鳴滝の命令を無視して。

だが、そんな必要はなかったのだ。

夏海が自分からディケイドを倒すと決心してくれたからだ。しかしキバーラはただディケイドを倒すだけではつまらないと考えていた。

夏海がディケイドを倒した後、のことを考えていた。

キバーラ「（鳴滝さんは何も指示されていないけど・・・。アタシだって好きなことをしたいわ。）」

キバーラはニヤリと笑い、暗闇の中へと消えていった・・・。

乾「渡。お前を呼んだ理由はわかるよな？」

渡「破壊のことですか。」

乾「ああ。」

乾と渡は一人きりで話し合つために、別室にいた。

破壊のこと、鳴滝のこと、そしてディケイドのこと・・・。まだまだわからないことが多いすぎる。

乾「ディケイドがこの世界に2人いることは知ってるだろ？」「

渡「ええ。ディケイドとファイナルディケイドですよね。それが？」

乾「ディケイドがここまで破壊行動をしていない理由をつかんだぜ。」

「

渡「え！？」

今まで「ディケイドが破壊行動（破壊衝動）を抑えられてきた理由。それは隣にいつも「光夏海」がいたかららしい。」

渡「その情報は確かなんですね？」

乾「ああ。ファイナルディケイドが破壊衝動に駆られたのもやはりこれが原因している。」

渡「しかし・・・！最初はまだ夏海さんは傍にいましたよね？」

乾「・・・忘れたのか。大ショックカーの存在を。」

渡「・・・！」

大ショックカーによつて夏海を連れ去られた「ディケイド（鳴滝のディケイド）。

夏海を取り戻すことはできたが、その闘いの最中に、いつも一緒に旅をしていた仮面ライダークウガが自分をかばつて死んでしまった。世界の融合を防ぐために俺らは「ディケイド」と闘つた。死に物狂いで。

・・・最終的に。

カブトのライダーキックが「ディケイドをかばつた夏海に当たつてしまつた。そのまま・・・夏海は彼の目の前で死んでいった。その時の表情を未だ忘れる事はない。・・・笑つていたから。

ここから「ディケイドは激情態となつた。ただ破壊する。それだけを目的として。

乾「結果はノーディケイドの完全勝利。俺らは必死で逃げてきた。」

渡「・・・。乾さん。僕もあなたに話さねばならないことがあるん

です。」

乾「なんだ？」

渡「それが」

野上「渡さん！乾さん！……！」

渡の言葉をさえぎるよつこ、部屋の中に良太郎が入ってきていた。

乾「野上か。どうした？」

野上「士さんが田を覚ました……！」

渡「本当ですか？！」

夏海の田の前には剣崎が立っていた。

夏海「剣崎さん。私に何か用ですか？」

剣崎「光夏海。お前は勘違いしてることがある。」

夏海「なんとなく予想はつきますけど。一体なんですか？」

剣崎「いいか、よく聞け。お前は鳴滝にだまされているだけだ。利用されているだけなんだ。」

夏海「何を言つてるんですか。鳴滝さんは本当のことを話す、と言つていました。だから私が聞いたことはすべて本当なんです。」

剣崎「・・・夏海。思い出してみろ。お前とディケイド・・・門矢士の思い出を。」

夏海「思い出したって何も変わりませんよ。私がディケイドを倒すまでは・・・あなたもディケイドを倒さなければ世界は救われないと言つていたじゃありませんか！・・・私がディケイドを倒しま

す。なので邪魔だけはしないでください。」

剣崎「今の土に・・・そんな闘いができるほどどの体じゃない。もう少し待つてくれないか?」

夏海はニヤッと笑った。

剣崎「な、何がおかしい!?!」

夏海「結局はあなたも『ライダー』にしかすぎない、ってことですね。結局デイケイドを倒すことはできなかつた。」

剣崎「そ、それは・・・」

夏海「なぜ倒せなかつたか教えてあげましようか?・・・あなたはまだ迷つているんです。デイケイドを倒して本当に世界が救われるのか、つてね。」

剣崎「迷つてなどいない!ただ・・・、ただ今の状態であいつを戦わせるわけにはいかないってことだ!わかつてくれ!君も悪魔じやないんだ。頼む!」

剣崎が必死に頭を下げる。

だが夏海はそれを無視して、その横を過ぎ去ろうとした。

剣崎「・・・どうしてもとこののなら仕方ない。ここで痛い目にあつてもらひ。」

夏海「・・・剣崎さん。意味のない戦いはしないほうがいいと思いますよ。お互い体力がもつたいないです。」

剣崎「だったら俺が言つたこと、わかってくれるのか?」

夏海「・・・」

剣崎が夏海と会っていると、士は田を覚ましていた。痛々しい体を少しずつ起しながら、あたりを見回す。

士「どうだよ、ここ……。」

野上「あ、目覚めましたか?」

士が小さな声で呟くと、部屋のドアの隙間から頭をひょこんと出す
野上がいた。

士「お前は……?」

野上「あ、野上良太郎といいます。」

士「……もしかして仮面ライダー電王か?」

野上「はい。なぜそれを?」

士「パラレルワールドで電王の世界に行つたことがあるからな。」

野上「そうですか。あ、まだ寝てないとダメですよ。水入れてきま
すね。」

野上が出て行つたのを見て、士はそのままベッドへ倒れこんだ。
まだ体が重い。熱も高いみつだ。おでこには冷え タが貼られてい
た。

士「……夏海。」

夏海「仕方ありませんね。無駄に体力を消耗したくありませんが。」

剣崎「じゃあ行くぞ。・・・変身。」

夏海「キバーラ！！」

キバーラ「はいはい？いくわよー！」

夏海「変身。」

夏海ＶＳ剣崎の闘いが始まった！！！

To be continue...

第九話 乾と渡、そして夏海と剣崎（後書き）

あれ、まだ士が空氣に近いような気がします
次回はもっと出でますよ。

そろそろ夏海VS士も入れたいのでね・・・
それから、次回あたりでコウスケが登場する予定です

お楽しみに！

世界を破壊し、世界を繋げ！

第十話 一人の固い絆（前書き）

- ・ユウスケが彼らと合流
- ・自分を責めるユウスケ
- ・土も自暴自棄気味
- ・やはりビビキは安定剤
(夏海VS剣崎は次回)

世界の破壊者ディケイド。

ライダー大戦の世界をめぐり、その瞳は何を見る？

第十話 一人の固い絆

士はまだ思うように動けないので、まだ横になっていた。
そして深く考え込んでいた。

自分がここにいていいのか、そして俺はやはり鳴滝が言つようになつた
本当の破壊者」なのか。否か。

ユウスケや夏海や海東の安否も気になる。特に海東だ。
あのまま姿を見ていな。ユウスケもまだあのままなのか……夏
海だつて……。

士「くそ……！」

一人では何もできない。俺の力だけじゃ何も……。
今までは他のライダーの力を使って戦ってきた。
一人じゃない。隣にはいつも誰かがいた。その環境に慣れ過ぎたの
かも知れない。

夏海達と出会う前のことは曖昧だ。でもきっと一人だったと思つ。
自分の性格からしてきっと。

士がため息をつくと、外が騒がしくなった。
複数人數の足音と話し声が聞こえていた。

士「……何かあったのか？」

『バン！……！』

ユウスケ「士……！……！」

野上「あ、ちょっと……！」

ヒビキ「青年！ちょっと落ち着いて！」

息を切らしたユウスケが部屋に入ってきた。
士は目を見開き、ユウスケを見た。

士「つ！？ ユウスケ？！」

ユウスケ「ハアハア・・・士・・・！」

士「なんでお前が・・・それより・・・元に戻ったんだな。」

ユウスケ「・・・ああ。士は大丈夫なのか？俺、五代さんに聞いてこの場所を教えてもらつたんだ。」

士「五代？誰だそれは。」

ユウスケ「俺を元の戻してくれた救世主だよー。」

野上「士さん、この人は？」

士「俺の仲間だ。」

ユウスケ「あ！紹介が遅れてしまません。小野寺ユウスケです。」

ヒビキ「・・・クウガくん？」

ユウスケ「え？あ、はい。そうですけど・・・なぜそれを？」

ヒビキ「いーや。こっちの話。」

ユウスケ「・・・？？？」

士はヒビキの様子を怪訝そうに見たが、追及はしなかつた。

士「・・・。ユウスケ。お前、何かあったのか？」

ユウスケ「つ！？え・・・！」

士「さつきから空元氣っぽい感じがするぞ・・・？」

ユウスケ「・・・つ・・・！士・・・。今から話すこと・・・最後まで聞いてくれるか？」

士「・・・ああ。当たり前だろ。」

野上は一人の空氣を察したのか、部屋を出て行つた。
しかしヒビキは居座る気満々のようで、近くのイスを取つてきて座つていた。

士「あんたは残るんだな。」

ヒビキ「一応剣崎くんから言われてるからね。まあ別に俺はどうちでもいいんだけど。世界とかよくわかんないし。そんなに深く考えてもしようがなーって思うし。ははは！」

ユウスケは自分の周りで起きたこと、そして海東との出来事について話しあした・・・。

俺、ちょっと今まで記憶がなかつたんだ。

五代さんに話しかけられるまで・・・。ずっと暗闇の中をさまよつてた。

だからそれより前のことははつきりと覚えてない。自分が何をしたのかつてことも・・・。

でも・・・俺、とんでもないことをしてしまつたんだよ・・・！一緒に戦つてきたのに・・・俺の手は誰かを握りつぶすためにはつてきたわけじゃないのに・・・俺の目的はみんなの笑顔を守るために、だつたのに・・・！

・・・俺が目を覚ました時にはもう事がついてたんだ。もひ手遅れで・・・どうしようもなくて。

目の前に血まみれの海東が倒れてたんだ。それを見た瞬間俺がやつたんだつて思つたんだ。

海東は『弱い僕が悪い』って言つてたけど。弱いのは俺だ・・・！究極の力に呑まれる俺が弱いんだ！

もつといけないのはそのまま海東を置いてしまったこと……。絶対に助ける！って……。そのときは言葉に出してたけど。本当に

そう思つてたのかな、って……！

俺……最低だ。

あのとき士を守れたって思つたけど……結局はこれだよ。やっぱり俺は何も守れないんだ、って。誰かの笑顔を守るどころか、失つてるんだって。

そんな俺に……クウガの資格なんてないよ……。

士「……コウスケ……。」

ユウスケ「士……俺のせいで海東が……。」

士は戸惑っていた。

目の前のユウスケのこと。そしてユウスケが話した海東のこと。そして自分を責め続けているユウスケに、何も言えない自分にも腹が立つた。

士「（俺はこいつに何を言つてやつたらいい？）どう声をかけてやればいい？」

ユウスケ「ごめんな、士。俺が全部悪いんだ。俺、五代さんに助けてもらつてなかつたらきつと……夏海ひやんや士にだつてあんなことしてたかもしれないんだ……。俺……クウガでいる資格なんてないんだよね。はは……。誰か、俺のかわりになつてくれる人いなかないかな……。」

士は過去のことを何一つ覚えていない。

訳もわからぬまま、ディケイドとなつて闘つてきた。世界を救えてきたと思っていた。

たまに面倒なこともあつたが、それなりに楽しく旅をしていたつも

りだった。

でもどこかで……。『いかで自分はこんな楽しい毎日を送つてもいいのか、と思つところもあつた。

士「（以前の俺を知る人物が現れたら……。どう思うんだろうな。）

鳴滝に『本当の破壊者はお前だ。』だの、『お前は俺だ。』だの言われたことも、今の士には響いているのかもしれない。それにも夏海の姿を見ないというのも、彼の中で気持ちが揺らぐ原因でもあつた。

彼女もまた、彼にとつて大切な仲間だから……。

そんな一人を見ていたヒビキが、突然話し出した。

ヒビキ「自分のかわりなんていないと思つよ。」

ユウスケ「……え？ ……」

ヒビキ「青年……小野寺くんのかわりなんて誰もいない。変わつてくれる人なんて誰もいないんだよ。君たちは約束したんじやなかつた？『笑顔を守る』って。」

ユウスケ「だけど……！俺は反対のことをしてしまったんですよ。・・？」

ヒビキ「誰にだって間違いはあるさ。大丈夫。まだやり直せる。若いんだしね、ははは！」

ヒビキ「・・・それから。」

ヒビキ「海東くんは死んでいないよ。」

ユウスケ「・・・え？！」

ヒビキ「うん。だから安心しなよ。小野寺くんは『世界中の人の笑顔を守る』んだろ？士くんは『小野寺くんの笑顔を守る』んだろ？」

士は驚いた。なぜ最近あつたばかりの人間にそのことがわかつているのか、といひことに。

ヒビキ「大丈夫！もつと自信を持つて！本当の敵は他にいるらしいからね。今、いろいろと調べてるところみたい。これからはきっと仲間として闘うことになるだらうから・・・よろしくね！」

ヒビキはそう言つて笑うと、部屋を出て行つた。

士とコウスケは黙つてお互の顔を見合つた。そして笑つた・・・。

士『『いいつが人の笑顔を守るなら、俺は・・・いいつの笑顔を守る！』』

To be continue...

第十話 一人の固い絆（後書き）

本編に出てきたセリフを少しずつ使うように努力しています。
今回は第3話に出てきたセリフです。すごいあのシーンが心に残っています。

それまでの士とユウスケって微妙な関係性でしたけど、これによつてグッと距離が縮まったように感じるんですよね。やっぱり「士の説教」って偉大だなって思いましたね（（笑 天道語録に続く、士の説教もライダーファンの中では有名なんぢゃないんでしょ？）

それではまた次回お会いしましょー！

全てを破壊し、全てを繋げ！！

第十一話 海東と鳴滝の思惑と役目（前書き）

- ・ 夏海 Ｖ S 剣崎
- ・ 海東の本来の役目と思惑
- ・ 鳴滝の思惑と海東
- ・ 土、夏海と・・・

世界の破壊者ディケイド。
ライダー大戦の世界をめぐり、その瞳は何を見る？

第十一話 海東と鳴滝の思惑と役目

夏海は剣崎に対して優勢だった。

戦いは初めてだったが、全てキバーラが指示してくれた。

その通りに動くだけだったし、これなら自分でも戦えると思った。

逆に剣崎は焦っていた。

戦いが初めてのはずの相手にこんなにも苦戦するとは思っていなかつたのだ。

彼女に少しだけ痛い目を遭わせ、鳴滝の思惑を聞いたといっていたのに・・・。

このままだと自分が危ない。

そう思った剣崎は少し間を取つた。そしてこいつ尋ねた。

K剣「光夏海。君の目的はティケイドを倒すことだけなのか?」「夏海」「はい。それが私の役目です。私にしかできない・・・役目です。」

K剣「驚いたな。君は鳴滝の思惑を見切ると思つたんだが。」

キバーラ「夏海ちゃん、こんな話に付き合つてゐる暇はないわよ?一氣に行くわよー!」

やはり。

キバーラは鳴滝とつながつている。ということは鳴滝の思惑はすべて把握しているはず。

だから今も話を止めようとした。その前に・・・剣崎はなんとかとめる必要があつたのだ。

K剣「しょうがない。痛いかもしないが、この攻撃を受けてもら

う！

「スピードテン！ ジャック！ クイーン！ キング！ エース！ ロイヤルストレートフラッシュ！」

夏海はよけきれず、剣崎の攻撃が当たってしまった。

キバー ラ「あら、剣崎一真。女の子にも容赦ないのね。だからモテないのよ。」

K劍「今のティケイドと闘わせるつもりはない。」
キバラ「あら。ティケイドの居場所を知っているようね。」

剣崎は変身を解き、夏海のもとへと歩いた。

「光夏海。ディケイドは世界の融合を進め、世界を破壊しようとしている。それは本当だ。しかし・・・。鳴滝に何を吹き込まれたか知らないが・・・。君の役目はディケイドをとめることだ。」
夏海「・・・、剣崎さん。あなたは士くんを恨んでいるんじゃないですか？」

「やうやく、お前によく知れたとて、劍崎、”デイケイド”を恨んでこる。

海東はある人物を探していた。

ヒクウガと闘つたときに出来た傷は、目を覚ました時には完全に治

つていた。

自分でも驚いた。この世界は本当に現実か、と。

海東「……そうだ。僕はディエンドだったな。」

ディエンドの役目。

彼は本来の役目を封印していた。それがきっかけでまた世界は消滅へと向かっている。

その現実を。彼は気付いていた。

彼の役目は「世界を修復すること」。

ディエンドライバーの力で「リセットすること」。

その役目をしなかつた理由は簡単だ。

海東「せっかくできた仲間を失うことになるじゃないか……。」

『仲間』。

彼が一番嫌いな言葉だった。

そんなものができたとしても、結局は失われてしまう。そう彼の脳裏に焼きつかれていた。

だが、士と出会って彼のその考えは変わってきた。

海東「せっかくのお宝を……ここで逃がすわけにはいかないんだ。

・・・ねえ、鳴滝さん?」

鳴滝「・・・!」

海東は近くで聞いていた鳴滝に声をかけた。
鳴滝は驚いた顔をして、海東のもとへ出てきた。

海東「驚いたな。鳴滝さんがまだその姿でいるなんて。」

鳴滝「・・・ファイナルディケイドのことか。もうすでになつてい

る。」

海東「ほお。じゃあなぜまたその仮の姿に？」

鳴滝「君に面白こと教えてあげよつと黙つてな。」の姿のまつが動きやすい。」

海東「大体想像はつくナゾね・・・。どうせ十のことがだらう。」

鳴滝はニヤリと海東に笑いかけた。

鳴滝「ディケイドは今・・・あいつらの陣にいるだ。」

海東「・・・？」

海東は驚いた。

海東「（士が・・・捕まつたといひとか？いや、きっと他に理由があるはず・・・。・・・まさか。）」

海東「鳴滝さん。あなたが何かしたんだりうっだめだなあ。士は僕の宝だよ？その大事な宝を傷つける奴は・・・僕が許さない。」

鳴滝「ふん。ちょっと遊んでやつただけだ。ファイナルディケイドの姿で、な。」

海東「じゃあ聞くけど。ナツメロンを使って何をする気だい？」

鳴滝は表情をしかめた。

海東「ナツメロンは・・・君にとつても大切な人のはずだ。それなのに・・・。」

鳴滝「私は何も知らない。私はただ・・・ディケイドを倒すこととを彼女に言つただけだ！」

海東「・・・はあ・・・、鳴滝さん。今度はあなたが思つたことをナツメロンが味わうことになるつてこと・・・わすれてるんじやないかな？」

鳴滝「……」

海東「鳴滝さん。ディケイドを倒さなければいけないことはわかる。そして僕の役目も果たさねばならないことだつて。だけどね？・・・ナツメロンと士の絆にひびを入れさせいやいけないと思つた。」

鳴滝はうつむいて、唇をかんだ。

その鳴滝を見て、海東はほほ笑む。

海東「とりあえず、僕はナツメロンと士を探しに行くよ。鳴滝さんもはやく決心したまえ。」

8人のライダーがいる陣はあわただしくなっていた。
それもそのはず・・・。

渡「士さんがいない？」

城戸「すまん！！！俺が・・・つとつとしている間に・・・。」

士が部屋から・・・この城から脱走していたからだ。
ユウスケも焦つていた。

ユウスケ「・・・鳴滝さんや夏海ちゃんに会つたら・・・」

ユウスケが飛び出していった。

野上「あ、小野寺さん！！！」

ヒビキ「とりあえず、良太郎と俺で探しに行つてくるよ。渡は剣崎に伝えておいてくれる？」

渡「はい・・・わかりました。」

天道「つたく。だから言つたんだ。こんな馬鹿に見張りをやらせるのはだめだ、とな。」

乾「天道！これ以上言つな！それに、お前だつて近くにいたらうが！！！」

城戸「ほんとにじめん・・・！」

津上「城戸さんだけの責任じゃありません。僕たちだつてここにいたんですから・・・。」

野上とヒビキは土を探しに出かけ、渡は焦りながらも剣崎に連絡をしている。

天道は特に何も考えていないように見えて、少し後悔しているような表情を時々していた。

乾はその天道を抑えながらも、いてもたつてもいられないくらい心配していた。

津上は城戸のそばにかけよつて、優しく話しかけていた。

そのとき。

士がもうすでに夏海と遭遇していたとは知らずに・・・。

第十一話 海東と鳴滝の思惑と役目（後書き）

今回は海東と鳴滝の場面がメインです。

剣崎VS夏海の場面が少なくてごめんなさい…；

次回は土VS夏海の場面を全面的に書くつもりです！！

この戦いが終われば、終盤戦に向けてキューピッドに

進んでいきそうな予感がします。

がんばって更新作業をしていきますので、

応援・感想等よろしくお願いします！！！

全てを破壊し、全てを繋げ！！！

第十一話 退くか、それとも闘つか（前編）（前書き）

・ 夏海 Ｖ Ｓ士

・ 士、いきなりコンプリートフォームになります

（設定いきなり無視（爆　ただ、あまり意味はありません）

今回は夏海 Ｖ Ｓ士を前編・後編にわけてお届けします。

（ 注意　心理描写多め、戦闘シーン雑）

世界の破壊者＝ティケイド。

ライダー大戦の世界をめぐり、その瞳は何を見る？

第十一話 退くか、それとも闘うか（前編）

城から士がいなくなつて、彼らが騒いでいる間、士はひとり、何かに導かれるように・・・彷徨つていた。なぜ今自分がここを歩いているのか。皆目見当がつかない。しかし、きっと誰かが自分が自分を呼んでいるのだ。そう思った。そして彼の足が止まつた。

目の前にはキバーラと夏海がいた。

士「・・・夏海か。」

夏海「士くん。来てくれるつて信じてました。」

士「・・・そうか、俺を呼んでたのはお前だったのか。」

夏海「ええ・・・。士くん。単刀直入に言います。」

士「・・・大体想像つくが・・・言つてみろよ。」

夏海「士くん。いえ、破壊者ディケイド。世界のために死んでもらいます。」

士はこうなることを予想していたかのよつこ、平然な顔をして夏海を見ていた。しかし内心はそうではなかつた。

夏海が今からすることについては大方予想はついていた。きっと自分を倒しに来ると。だが、自分で葛藤していた。

士「（俺は夏海と闘えるのか？本氣で・・・？）」

向ひが本氣なら、ひも本氣で向かわねばならぬ。

キバーラ「ティケイドー？ 夏海ちゃんは本氣吗？ 生半可な氣持ちで受けんなら……。ただじゃおかぬわよ。」

士「そんなつもつはやうたらない。いいぜ。俺を倒せるもんなら倒してみるよ。」

夏海「強氣でいられるのは今のつひですよ……。」

士は戸惑つた。

目の前の相手がこんなに激しいオーラを見せたことが、今まであつただろうか。

そして、戦いに不慣れな筈なのにこれほどの自信に充ち溢れている。きっと戦いの指示はすべてキバーラの役目なんだろ？ とにかく、彼はこの場の雰囲気に戸惑つていた。

夏海「そろそろこきますよ。」

士「……ああ。いくぜ。」

夏海・士「変身！」

「KAMEN RIDER DECADE ...」

士は仮面ライダーティケイドー、そして夏海は仮面ライダー・キバーラへと変身した。

DCD「その姿は……？」

キバーラ「これがキバーラの真の姿よ。」

DCD「やうかよ……。それじゃ、一氣に行くぜ。」

[KUUGA AGITO RYUKI FINE BRADE
HIBIKI KABUTO DEN-O KIVA
FINAL KAMEN RIDE DECADE ! !]

キバーラ「あら? ノンプリートフォームは使えないはずじゃなかつたかしら?」

「口・口・かな
せ・て・み・な・き・や・わ・か・ん・な・し・セ

とは二つのものの、少し不安げな士。

たかそんな不安など気にしている場合ではなかつた。 ますに彼女の動きを止める必要が・・・

CDCD 「んぐうあーー！」

「ギハ二七一、おも見をしてる余裕なんてありませんよ!!」

卷之三

どうにか攻撃を最小限に済ませることができたが、パワーもあるせい
か少し傷が痛んだ。

CDUD 「ちつ。なかなかやるんだな！」

ATTACK RIDE BLAST!!

バン！ バン！ バン！

夏海が士がいるすぐ手前まで走りこんてきて、士のボディを殴った。

CDCD んぐああー!

士はなかなか思うような戦い方ができず、焦っていた。

息も上がりでました。本調子ではなし甘にのてこの戦いにもともと不利だ。

たが、じりじりと下かるわけにはいかない。覚悟を決めなければならぬのだ。

その後も一方的に夏海が攻撃をしている。

アーラー、わいあの勢いほどのしたんですか!!ケイド!!ハ

「……」

[ATTACK RIDE SLASH !]
[DECADE !!]

ギハリミテスケリ!!

ニギバー ラ「うああああああああああああああ」

その二人の闘いをそつと見つめる影が一つ。

一人は鳴滝という男。ファイナルディケイド、門矢士もある。
もう一人は五代雄介。仮面ライダークウガに変身する者だ。

五代「門矢さん！」

鳴滝「今は、鳴滝だ。」

五代「・・・なれないなあ、その姿には・・・。といひで。本気なんですね、あなたは。」

鳴滝「何をだ。」

五代「・・・あの時あなたが味わった苦痛を、今度は彼女に負わせるつもりだと・・・？」

鳴滝が唇をかむ。その様子を五代は見、そしてニコッと笑った。

五代「今ならまだやり直せるはずです。彼らの闘いをとめてあげてください・・・！」

鳴滝「とめるわけにはいかない！！ディケイドを倒さなければ何も変わらない！誰かがその役目を果たさない限り！何も始まらない！何も・・・。」

鳴滝の表情は見えない。しかし五代にはわかつた。
彼もまた迷っているのだと・・・。

To be continue...

第十一話 退くか、それとも闘つか（前編）（後書き）

五代さん完璧に登場（笑）

今まで、名前を出してセリフを言つていう場面が
なかつたので、わかりにくかつたかなあと思ったので、
ここで登場させてみました（笑）

そして土V.S 夏海。

これは本当にしつかり書かないと思つたので
前編と後編に分けさせていただきました。
でも、これで終わりじゃありません。

ここから一リストへと向かっていく大事な話です！
できれば20話くらいには終わりたいところですが・・・
それは多分難しいと思うので、じっくりじっくりと
考えながら更新作業をしていきます！

長くなりました。

次回の「仮面ライダーティケイド 本当のライダー大戦」を
お楽しみに！！！

全てを破壊し、全てを繋げ！！

第十二話 退くか、それとも闘つか（後編）（前書き）

- ・土V.S 夏海
- ・戦闘不能になつたところで五代登場
- ・ディケイドがいる意味

世界の破壊者「ディケイド」。
ライダー対戦の世界をめぐり、その瞳は何を見る？

第十二話 退ぐか、それとも闘つか（後編）

お互いの必殺技を受けて、辺りは大きな爆発が起こった。

士と夏海はお互いその攻撃を受けたが、ダメージの違いがあった。夏海は急所をはずしておりかすり傷程度で済んだのだが、士は夏海の攻撃をまともに受けたせいか、変身が解けていた。

士「んぐあ・・・ー！ガハツ！…！」

口から血を吐き、息もあがつている。

もつとも、士らしくない闘い方ともいえた。

本来の彼なら、急所をはずすようなことは絶対にしない。ある程度痛めつけられるくらいの攻撃は仕掛けるはずなのだ。

夏海は少しいらいらしていた。士の闘い方に。

ノキバーラ「士くん。なんで本気で闘おうとしないんですか！…！」

士「…」

士は何も言葉にしない。ぱろぱろの姿になしながらも必死で立ち上がりうとしている。

キバーラ「まだやるつもり？だったら覚悟じといたほうがいいわよ？」

士「もともとお前らはそのつもりで俺と戦ってるんだひつ・・・？」
だつたら最後までやれよ。」

キバーラ「あら、もう変身しないつもり？」

ＤＣＤ「・・・もつと当たつていい！俺を倒すことがお前の役目なんだろうが！」

Ｎキバーラ「・・・士くん・・・。わかりました。キバーラ！いきます！！」

キバーラ「・・・オッケー！」

士の体力はほとんど限界に等しい。この戦いの終わりも見えている。だが士はやめようとはしなかった。今の彼は・・・何を考えているんだろうか・・・。

キバーラは思い出していた。士たちとあつたときのことを。そのときの彼はまだ少し仲間という言葉に抵抗があつた時代。しかし、一緒に旅を続けていくにつれて彼には仲間との絆という言葉が似合っているような気がしていた。

そんなときにおきた今回のライダー大戦。いや、前回のライダー大戦のときのティケイドも同じだった。前回と今回のティケイドが同一人物だから当たり前なのだけれど。

キバーラ「（もう目の前の男は覚悟を決めている・・・なぜ？相手が夏海ちゃんだから？・・・もうわからない・・・。鳴滝さん。あなたはこの場面を見ていてどう思うの？・・・ねえ・・・。）」

〔ATTACK RIDE SLASH !!〕

ＤＣＤ「ハアアアー！」《カキン！ー》

Ｎキバーラ「つ！－きやあつ！－」

まだ士に力は残っているようだ。夏海の攻撃を押し返した。

だがもう彼に何かを仕掛ける体力は残っていない。彼女の攻撃を受けるか・・・少しそこへか庇うかするだけ・・・。攻撃を受ける回数がだんだんと増えていく。

「アアア！――！」
「――キバー ラー セルセルおしまいにします！――！」

DCD「：」ハアハアハア：」

FINAL ATTACK RHDE DECADE -!- [

士の必殺技は彼女の剣によつてはじかれ、そのまま夏海の攻撃が彼の体に直撃した。

土は、姿を解除され、そのまま大きく体が吹き飛ばされた。地面に強くたたきつけられた土は、顔をゆがめながら必死で立ち上がりうつとするがそのまま倒れこんだ。

夏海は変身を解き、彼の元へ駆け寄った。

キバー ラ「どうするの? まだ生きてるわよ?」

夏海一

夏海の脳裏には今まで士と過ごした思い出が映りだされていた。必死で思い出すのをやめようとしている夏海だが、忘れよう忘れようと思うたびに強く彼のことが脳裏に映るのだ。今の夏海に・・・士を倒すことはできなかつた。

夏海「…………しげるへせ田を覚めな」と思つてゐる。このままでは

い
で
す。

キバー ラ「あら、そう。だつたら田を覚ましたときばぢうかぬのへ。」
夏海「・・・それは・・・!」

キバーラは夏海のうつむいた表情を見てニヤッと笑った。

キバーラ「そのときが来る前に。今のうちに倒しておかないとダメなのよ。」

夏海「・・・そんな。」

五代「それはちょっと間違ってるんじゃないですか？」

キバーラ「あら？ 見かけない顔ね。」

五代「士くんを・・・ここで失うわけにはいかないからね。今後のためにも。」

キバーラ「今後なんてないわよ。ここでディケイドを倒して、すべての世界が救われる。」

五代「君は鳴滝さん・・・ファイナルディケイドから何も聞かされていなって事ですね。よくわかりましたよ。」

キバーラ「何ですって？！ いつたいどうこうことなのよ――！」

夏海は一人の会話を聞いていたが何のことを話しているのかまったくわからなかつた。

彼女のそばには倒れているディケイド・・・士がいた。

夏海「（私は・・・私は本当にこれでよかつたの？ 士くんは私に倒されることを望んでいたんですか？・・・ディケイドは、本当に倒されなければいけなかつたの・・・？）

五代「とにかく。ディケイドがいてもらわなければ困ることが先々起こるんです。彼を君に奪われる前に俺が彼を奪い返しにきたんだ。」

夏海「あのーまつてください！！」

五代「・・・夏海さん、でしたね？」

夏海「あ、はい・・・教えてもらいたいことがあります。」

五代「手短に話せることなら。」

夏海「ディケイドはなぜ生まれたんですか？」

五代「・・・もともとディケイドは大ショックカーのものだった。そのとき首領だったのが門矢士。これは君も知っていることだと思いますけど？」

夏海「はじめからわかつてて作られたんですか？ディケイドが世界の破壊者となるつてことを・・・」

五代「それは・・・俺にもわからないよ。俺は大ショックカーの人間じゃないしね！」

そういうつて五代は土を捏ぎ、オーロラの中へと消えていった。

ディケイドの存在意味。

それはまだ一人の人間を除きわかっていないことである・・・。

鳴滝はあせっていた。

自分の体が思うように動かなくなっている。

彼は語った。もうやめようの姿でこいつはこれ以上限界が近いのだ
と。

鳴滝「……ディケイド。それから終わりが近づいてくるみたいだ。」

To be continue...

第十二話 退くか、それとも闘つか（後編）（後書き）

うーん・・・

眠い中書いているのでどんだけまともなのかわかりません（汗
加筆すると思います、この回・・・最も自信がない回になってしまった。

一番大事な話のはずだったんですけどねえ・・・

次回はユウスケ達が夏海と合流します。
そしてやはり五代は偉大です。
お楽しみに！！

すべてを破壊しすべてを繋げ！

第十四話 夏海の後悔と鳴滝の決断（前書き）

- ・夏海に本来話すべきことが話される。
- ・鳴滝が決断したことは一体・・・
- ・五代は偉大（＝執筆者は五代頗るらしい）
- ・士が空氣

世界の破壊者ティケイド。

ライダー大戦の世界をめぐり、その瞳は何を見る？

第十四話 夏海の後悔と鳴滝の決断

夏海は立りぬけていた。

先ほどの闘いは自分が勝った。でも嬉しいといつも氣分ではなかつた。ディケイドを倒し、世界が救われたとしても……。その後は？士くんは消えたままなの？

キバーラには『早くディケイドを見つけ出して』とぐさを刺された。でも……この場所から一步も動くことができなかつた。その前の闘いの傷が癒えていないであろう士くんを……私は一方的に攻撃をした。キバーラに指示されながら、だけど……。鳴滝さんは『ディケイドをとめられるのは君だけだ』と言つていた。でも……まだ士くんは破壊者として覚醒していない……気がした。制御装置は壊れていると言われても……。ピンとこない。

夏海「私は……私は……！」

夏海は涙をこらえきれず、その場に崩れ落ちた。

あの決断が正しかったのか。そんなことはどうでもよかつた。鳴滝を簡単に信じてよかつたのか。それもどうでもよかつた。ただ。キバーラの言つことを信じてよかつたのか。それだけが頭をよぎつたのだ。

鳴滝はディケイドをなぜか恨んでいる。倒してくれ、とまでは言つていなかつたが、ディケイドを止めてくれ、とは言つていた。ネガの世界の夏海は『ディケイドを倒す』と断言していたのを夏海は思い出した。

そのディケイドとは……本当に士のことなんだろうか、と。

ユウスケ「……夏海ちゃん？」

するはずもない声が夏海の耳に飛び込んできた。
見上げると心配そうな表情をしているユウスケがたつっていた。

夏海「……ユウスケ……！」

ユウスケ「大丈夫？！何があつたの？……あ、そういうえば……
！土見なかつた？？急にいなくなつちゃつてさ……。」

夏海「……」

夏海は信じられなかつた。

ユウスケはアルティメットクウガになつたばず、と。

夏海「ユウスケはなんでここ……？なんで……？」

ユウスケ「な、夏海ちゃん？！な、泣かないで……お、俺、どうし
たらいいかわからぬよ……！」（あたふた）

夏海「ご、ごめんなさい……。」

ユウスケ「謝らないで……！もつと俺わかんなくなつちゃう……」

夏海「ふふ！ユウスケは相変わらずですね。」

ユウスケ「えええ？！どうこうことだよー……！」

2人の空気が和やかなモードになつている中、周りの空気は違つて
いた。

それに気づいた夏海は、はつとする。

そこには紅渡、剣崎一真など知つてゐる顔や知らない顔の人間が一
人を囲んでいたからだ。

夏海「ユウスケ……」

ユウスケ「え？ ああ。」の人たちは・・・今は一緒に土を探しに・・・

・。

剣崎「小野寺。お前はちょっとさがつてや。」

ユウスケ「え？ ああ・・・うん。」

剣崎は单刀直入に夏海に尋ねた。

剣崎「ディケイド・・・いや、土をどこにやつた？」

ユウスケ「え？！ なんで夏海ちゃんにそんなこと聞くんだよーーー。」

渡「小野寺さん。」

渡がユウスケを制す。

剣崎「お前はディケイドを倒すのが目的だつたんだろう？」

ユウスケ「・・・そんな・・・夏海ちゃんが？！」

剣崎「ここには戦闘の爪痕が残つてゐる。だが・・・その本人がい
ない。」

津上「・・・消滅した・・・つてことですか？」

ユウスケ「・・・！？？」

夏海「ちがいます！ 私は・・・」

剣崎「しらばつくれる氣か？ 仮面ライダー キバーラ。」

渡「剣崎さん。とりあえず彼女の話を聞きましょう。それからです。」

剣崎「・・・それもそうだな。」

剣崎「・・・それもそうだな。」

確かに私は士くんと闘いました。

士くんはほとんど私に対して攻撃をしてこなかつた。戦い方も本気

じゃなかつた。

でも・・・士くんは私に倒されることがわかりきつているみたいに、こいつ言つたんです。

『もつと当たつてこい！俺を倒すことだがお前の役目なんだろ？がー！』って・・・。

そこからはキバーラが指示するまま動いていました。

そしたら・・・士くんが倒れたんです。でもまだちゃんと息はありました。

それに気づいたキバーラがどどめを刺しなさいって言つてたんですけど・・・それはできなかつた。

その間に誰かが来たんです。その人の顔は見たことがなかつたんですけど・・・。

その人が士君を連れてどこかへ消えていきました。私が話せることはない今までです。

ユウスケ「夏海ちゃん・・・」

夏海「鳴滝さんに言われました。ディケイドを止められるのは私だけだって。ディケイドライバーの制御装置がもう壊れているって・・・。何のことかは分からなかつたんですけど・・・。」

剣崎「・・・五代か。」

渡「五代さんに間違いないでしょうね。」

ユウスケ「え？五代さんが士を？！」

渡「ええ。五代さんは別ルートで今回の件を調べてもらつていたんですね。」

剣崎「それから・・・。光夏海。」

夏海「・・・はい。」

剣崎「確かにディケイドを止められるのはお前だけだ。それは確かだ。でもな、その制御装置がどうのこうのって話には妙に引っ掛け

るところがある。」

津上「僕もそう思います。」

渡「そこは『ティーン』で調べてもいいと思います。」

夏海「大樹さん？」

渡「ええ。」

鳴滝はまたも焦っていた。

だんだん自分が消滅に向かっていること。そして『世界の創設者』が現れるかもしれないということ。

鳴滝「……私も覚悟を決めなければいけないようだ。」

鳴滝「ディケイド。今度こそお前に話せなければいけないことがあるよつだ。」

五代は城へ土を連れ戻しに来ていた。
しかし、城には野上とビビキしかいなかつた。

五代「あれ？他の人たちは？」

野上「五代さんがつれてきた方を探しに出かけました。」

五代「あ、そうだったのか。悪いことしたかな。」

野上「いえ！早い方に越したことはありません。ビビキさん、五代さん。手当を手伝ってくれますか？」

ヒビキ「勿論。今度は逃がさないようにしてないとなーー。」

五代「逃がしたのヒビキさんでしょ？」

ヒビキ「あ、ばれた？」

五代「そりやばれますよー。だつて俺クウガだし。」

野上「五代さん、その理由意味わかんないですよ。」

五代「えー・・・そうかなあ・・・。」

仮面ライダー＝ディケイド 本当のライダー大戦

いよいよ本当の敵が明らかに・・・?!

To be continue...

第十四話 夏海の後悔と鳴滝の決断（後書き）

私は五代蠶原みたいです（爆

そして十四話です。

とうとう本当の敵がからつき始めています。
次回そのことが詳しく明らかになります。
それから・・・久々に海東が何かと鬭います。
「（ひづけ）期待（マタニシ）」
馬文を期待してください

全てを破壊し、全てを繋げ！！

第十五話 鳴滝の消滅、そして世界の創設者（前書き）

- ・世界の創設者
- ・鳴滝の消滅
- ・士が目覚めます
- ・海東ＶＳ？

世界の破壊者ティケイド。
ライダー大戦の世界をめぐり、その瞳は何を見る？

第十五話 鳴滝の消滅、そして世界の創設者

五代から連絡を受けた渡たちは、一度城に戻つてきていった。
もちろん夏海も一緒に、だ。

夏海はベッドに横たわっている土をじっと見つめていた。
ユウスケはその夏海を心配そうに見ていた。土はまだ目を瞑つたま
ま。

渡「夏海さんがいつも見ている夢。それは今のライダー大戦の世界
ではないんです。」

夏海「・・・はい。それは鳴滝さんからなんとなく聞いています。
渡「その場所にいたディケイドやあなたそつくりの女性のこととも？」

夏海「いえ・・・そこまでは・・・じゃあ・・・！ユウスケと土
くんが戦つたつていたのも・・・以前のライダー大戦のものだつて
ことですか？」

渡「え？」

夏海「私、見たんですね。ユウスケと土くんが戦つているところを。
そして・・・土くんが勝つところを。」

その夏海の話を聞いた渡や剣崎たち原典ライダー9人は驚いた表情
をしていた。

城戸「ちょ、ちょっと待つてくれよ！前回はそんな戦いなかつたぞ
？！」

夏海「え・・・？」

天道「これから起ることかもしれないな。」

ユウスケ「俺が土と戦うなんて・・・そんなことありえない！もし
あいつが暴走したときは・・・今度は俺がとめる！・・・」

天道「……それがその映像だとしたら？」

ユウスケ「…………！」

つまりこうこうことだ。

夏海が見たあの「士▽Sユウスケ」は過去のライダー大戦のものではなく、これから起こううる戦いということである。もしそうだとすれば予知夢……といえるだろうか。

ユウスケは士……ディケイドをとめるためにアルティメットクウガとなつた、ということになる。

今回は自分の意志で究極の闇と化した、ということであろう。だが夏海が見た光景は……クウガがディケイドに消滅される映像だつたのだ。

五代「……（〇号と戦つたときと同じ……なのかな。）」

五代だけは自分に思い当たることがあつたようだつた。

以前、〇号と戦つたあの日のことを……彼は思い出していた。初めて素手で人を殴つたという感覚を味わつた。自分の手は赤く染まつてしまつた。

その感覚が消え始めたのはだいぶたつた後だ。それ以来結局あの場所には戻つていない。

会えないまま……彼の世界も消滅を迎えた。それを彼は後悔している。今でも、これからも。

ユウスケ「俺……もしそんなことが起きたときは、絶対に暴走する士を止めてみせる。ちゃんと元に戻してみせる。予知夢どおりになんて絶対にいかせないよ！」

夏海「……ユウスケ……」

ユウスケ「……それに……俺は士の笑顔も守らないといけないから……」

ユウスケは笑顔を向けながらサムズアップした。

その笑顔を見た五代は、彼らに『あの人』のことを伝えよつとした。

・・そのとき。

野上「士さん?...」

野上のそう叫ぶ声が聞こえてきた。

士が目を覚ましたのである。

士「・・・つ・・・。」

ヒビキ「!」のやうう!なんで勝手にでてつちゃうかなー・・・。」

士「・・・悪かつたな。」

士はあたりを見渡すと、夏海とユウスケが視線に入ってきた。

夏海は今にも泣きそうな顔をしていて・・・ユウスケは笑っていた。

士「(対照的だな・・・、ここにつらう。)」

夏海「・・・つ、つかさくん・・・」

士「なんだ、ナシミカン。そんな顔してるとほんとに搾れるよつになつちまうぞ。」

夏海「・・・!」

「ピキー」 光家秘伝 笑いのツボ

士「ははははは・・・!おい・・・!け、けが人に!...やる!」と

じや・・・ねえだろ!!--ははは!!--!」

夏海「ふん!もう士君なんてしりません!!--!」

士「手加減しろ・・・!はははは!!--!!--!」

初めて見る原典ライダーたちはその様子をぽかんと見つめていた。特に剣崎は口を大きく開けて、すこく情けない顔をしている。

乾「……お前ら。さつき戦つたばかりじゃねえか。立ち直りつつーか・・・なんつーか・・・。ああーもつ意味わからんねえよ！」

津上「大丈夫ですよ、乾さん。僕もわからないですか。」

城戸「いーや！一番わからない状況に陥つてゐる、剣崎だぜ。見ろよ、あの情けない顔！！爆笑をさらうぜ！－あー・・・『レン』に見せてやりたいくらいだ！」

天道「お前もそんな顔をしていたぞ。」

城戸「なんだとお？！？」

士「・・・あー・・・うるさい。黙れ。」

渡「・・・士さん。もう平氣ですか？」

士「ああ・・・まだ体は重いが・・・平氣だぜ。」

渡「あなたに会わせたい人がいるんです。」

士「大体わかつてゐる。通せよ、いるんだろ？『鳴滝』。」

鳴滝はふらつく体をヒビキに支えられながら部屋に入ってきた。

士「・・・どうしたんだ？」

鳴滝「・・・私はもう時間がない。手短に言つ。」

士「おい・・・時間がないってどういうことだよ・・・！」

鳴滝「・・・世界の創設者・・・仮面ライダーファウンドを倒す・・・それが世界を救うもうひとつ的方法だ・・・。」

士「・・・仮面ライダーファウンドだと？」

鳴滝「・・・そうだ。そうすれば・・・ディケイドがいても世界は生まれない。これ以上破壊も進まないだろう・・・。」

その話を初めて聞いた夏海、士、ユウスケ、そして原典ライダー（五代以外）は驚く。

そして鳴滝は続けた。

鳴滝「……急いでくれ……。ディエンドが向かっている……。
その場所へ……。」

士「……海東が……？」

鳴滝「……もう本当に時間がない……。私はここで終わりのよ
うだ。」

士「……終わりだと? どうこうことだ……! 鳴滝……?」

鳴滝「ディケイド。お前は倒されなければいけない存在だった……
。だが今の状況下……、ディケイドを倒すことよりも……もつと
大事な……。（鳴滝がどんどん薄れていぐ）」

士「……鳴滝……! ! !」

鳴滝「ディケイド……いや、門矢士……。世界を……世界を
救ってくれ……。」

鳴滝が消滅した……士たちの目の前で。

その事実を知つていた原典ライダーはつむくような形で、それぞ
れ部屋を出て行く。

ユウスケと夏海は呆然とした表情をしてくる士を見つめていた。

士「……どうこうことだよ……。なんで……なんで鳴滝が消
えるんだ……?」

ユウスケ「士……とりあえず落ち着けって。」

士「……なんだ。ユウスケ……お前は知つていたのか?」

ユウスケ「……五代さんから、ちょっとだけ……。」

士「……夏海も……か。」

夏海「……」「めんなさい……」

士「いや、いい……。」「うなる」とは……大体わかつてた……からな。」

ユウスケはその士が言つた言葉を否定した。

ユウスケ「（わかつてたはずない。士がこんなに動搖した姿なんて……。初めて見た……。俺……）の士になんて声をかけていいのかわからないよ……。」

夏海もその動搖した姿の士を見て心配そうなまなざしを向けていた。

夏海「（士君……私は……私はなにをしてあげたらいいの……？！）

鳴滝が消滅した瞬間、海東は一人の男に出くわしていた。

海東「やあ。君が世界の創設者君かい？君のそのベルト……お宝だ！絶対にそれをいただく！」

創設者「……ふつ。できそこなこのディエンドか。そんなお前が我に勝とうなど、戯言にも程があるな。」

海東「失礼しちゃうな。僕はそんなに弱くないよ？」

創設者「……なら、ここで始末してやるわ。」

〔KAMEN RIDE-〕
〔KAMEN RIDER-〕

海東「变身！」

創設者「・・・変、身・・・」

〔DE-END!-!〕
〔FOUND!-!〕

To be continue:

第十五話 鳴滝の消滅、そして世界の創設者（後書き）

長くなつてしましました（汗
よつやく敵が見えてきました。

世界の創設者「仮面ライダーファウンド」。
もちろんオリジナルライダーです。

次回、このライダーの説明を書きますーー！
それではーー！

世界を破壊し、世界をつなげーー！

第十六話 ティエンドvsファウンド そして破壊者（前書き）

- ・士に「破壊者」となる・・・
- ・それをとめるゴウスケ達
- ・ティエンドvsファウンド

世界の破壊者ティケイド。
ライダー大戦の世界をめぐり、その瞳は何を見る？

第十六話 ティエンドvsファウンド そして破壊者

鳴滝が消滅した・・・。

士はまだそのことを受け入れられていなかつた。

彼は先ほど戦つたばかりなのだ。

鳴滝と出くわしたとき。今まで嫌な気分しかならなかつた。だが・・・この時だけは違つた。

そして士は氣付く。

心の奥底が疼くことに。

なぜなのかはわからない。そしてそれがなんのかも。

ユウスケ「士・・・」

士「つ・・・、悪い。ひとりにしてくれないか?」

夏海「で、でも!――」

夏海は今の士を一人にしたくはなかつた。

誰か傍に・・・自分が傍にいてあげたい。そんな気持ちを強く抱いていた。

だが・・・それは断られてしまつ・・・。

士「・・・つ、でてけよ。」

士が低い声で一人に言つ。

夏海が何か言おうとしたが、それをユウスケがとめた。

ユウスケ「士、何かあつたらすぐ呼べよ?」

士「・・・ああ。」

一人になる士。

まだ。

心が疼く。苛々する士。

士「俺の心は・・・何を求めてるんだ。俺はなんでこいつも・・・くそつーー。」

拳をベッドに叩きつける。

結局自分は無力で・・・破壊者でしかないのだろうか。弱い・・・のだろうか。

そう考えてしまつ自分が妬ましくて仕方がない。

士「・・・俺は。破壊者・・・なのか。」

『そり・・・お前は破壊者だ。それを受け入れろ・・・』

士「・・・だれだ?!!」

士がつぶやいた瞬間、何者かの声が聞こえてきた。

それに反応する士だが、姿が見えることはない。声だけが聞こえてくる・・・。

『鳴滝がなぜディケイドを恨んでいたかわかるか?』

士「・・・なんだつていうんだよ。」

『ディケイドがいること。自分がディケイドだったことで。仲間の世界が消滅してしまったからだ。』

十一

『消滅・・・イコール破壊された。そして・・・自分自身も。』

士「なつ・・・！」

『我がいれば世界は救われるのだ。お前は破壊者として生きろ。』

士 · · · · 、 破壞者 · · · · 。

世界の破壊

あけよう

! !

士は何が起つたのかわからなかつた。

自分の中に・・・まるで自分じゃないものが入ってきたような・・・
そんな感覚がした。

必死に抑え込もうとするが、その力はすさまじかつた。

「……………」

そんな士の叫び声が聞こえたのか、部屋にユウスケ達が入ってきた。

津上「士さん?」

ユウスケ「土・・・？！どうしたんだ・・・！！！」

野上が土に近づけようとしたのを、五代が止めた。

「野上、五代さん？」

五代「・・・そんな感じがする。」

夏海は必死で何かを抑え込もうとしている士に近寄る。

五代「夏海さん……ダメです！ 戻つて……！」

五代のその声も無視して・・・。

夏海「士くん！！ 私ですよ！ ナツミカンですよ・・・！」

「ああ！
ああ！」

夏海「やせひーーーーー」

士は近寄ってきた夏海を力いつぱい殴り飛ばしてしまう。
それを受け止めたユウスケは意思を固めていた。

ユウスケ「（俺が土を止める番だ。）」「

五代「ここは危険だ。とりあえず避難した方が・・・」
ユウスケ「俺は残ります、五代さん。」

五代「小野寺くん？！」

ユウスケ「……土が壊れたら……俺が止めなきやいけないんです。」

海東は焦りながらも相手の弱点を見つけていた。

DED「世界の創設者、といったね。」

FOUND「言つたが？」

DED「もつ君の弱点を発見済みだ。」

FOUND「ほつ。それは一体何だ？」
「あらかじても氣になぬ」と
だな。」

DED「簡単に奪ひと思つたかい？・・・はつ！…」

海東は相手の武器である剣を奪おうと試みていた。

その剣を奪えれば・・・！

FOUND「ほつ。そつきたか・・・。だが、がら空きだ。」
「FINAL ATTACK RIDE FOUND！…！」

DED「・・・？」

(大きな爆発音)

暗転

To be continue...

第十六話 ティーンドアヒュンド やして破壊者（後書き）

お待たせしました！－！

・・・だいぶ待たせてすみません（汗）

がんばりました！（爆）

・・・次回・・・もまた遅れそうですね（汗）

早めに更新できるように頑張りますね！－！

全てを破壊し、全てを繋げ！

第十七話 ディケイド激情態（前書き）

- ・「」での激情態は「破壊者・『ディケイド』」をあらわす。（正気じゃない状態のことを言っています）
- ・仮面ライダーファウンド＝最強
- ・海東は不死身すぎて、危ない

世界の破壊者『ディケイド』。

ライダー大戦の世界をめぐり、その瞳は何を見る？

第十七話 ディケイド激情態

士の”目”が変わった気がした。

いつもの彼の目ではない。

『触れたものすべて破壊する』と言われているような・・・そんな瞳をしていた。

士「うあああーーー！」

ユウスケ「士ーーー！」

ユウスケが飛び出す。そして士」と外へと駆け出した。

ユウスケ「・・・俺がお前を止める！・・・変身！ーーー！」

ユウスケは仮面ライダークウガ アルティメットフォームへと変身した。勿論自我はある。

それを見た士（破壊者）は、ニヤツと笑いディケイド激情態へと変身した。

DCDG「俺に触れるものはすべて破壊してやる・・・！」

ヒクウガ「士ー正氣に戻つてくれよーーー！」

士が攻撃を仕掛けてくるのを必死に受け止めながら、少しづつ距離を縮めていくユウスケ。

そして、右腕に力を込め士の体に向かって殴つた。

だが、それをあっさりと受け止められそのまま蹴り飛ばされてしまった。

ヒクウガ「うあつ！…さすがだな…強い…。でも…。負けるわけにはいかないんだ！！」

この戦いを夏海は遠田から見ていたが、この光景を見ていられなかつた。

夏海「…もし…ユウスケが…」

最悪な場合を考えてしまい、必死で頭の中で否定しようとしてもなかなか消えてくれない。

ただでさえ今の土の状態も気になるのだ。

あんな士を見たのも初めてで…。とひとつ破壊者と化してしまつたのか…。

夏海「士くん…！」

戦いは未だティケイド優勢。ユウスケは窮地に陥っていた。
しかし、なぜかわからないが心の中は冷静を保つていらわれていた。
士を救いたい、その思いだけが増していく。

ユウスケ「（俺がここ）で諦めたら…士はどうなるつていうんだ…！…俺はあきらめない！俺は…士の笑顔も守らなきゃいけない…」

〔FINAL ATTACK RIDE〕

ヒクウガ「これで終わらせよつてか…俺だって…!!」
ああああああああ…!!

「DECAD'E-----」

(大きな爆発音)

夏海「・・・土くん！・・・コウスケ！・・・」

海東はぼろぼろになりながらも、逃げ切っていた。

海東「はあ・・・インビジブルのカードがあつてよかつたよ・・・。」

攻撃が直撃する前にそのカードを作動させて、逃げていた。

海東「それにしても・・・弱点・・・ではなかつたということか。
だったら・・・ファウンドの力は・・・。」

海東はファウンドの能力を分析して、彼が持つ剣を奪えれば能力が無力化される、と考えていた。

しかしどライバーが変形し・・・そのまま弾き飛ばされるとは思つてもいなかつた。

海東「（ドライバーが変形するだと？！）」

ファウンドの力はきつと単体で倒すことはまず無理だらう。だが、海東は考えていた。『士のあの力を使えば…』と。

夏海がゆっくりと目を開けると、目の前には士を抱えているユウスケが立っていた。

その姿を見て涙を流す夏海。それを見て微笑むユウスケがいた。

士が目を覚ました。

あたりを見渡すと、目を赤くした夏海とそれを支えている、体中に傷をつけたユウスケがいた。

士「……俺はいったい……？」

ユウスケ「……やっぱり覚えてないんだな。俺もそうだったけど……。」

士「……まさか……。」士は傷だらけのユウスケを凝視する。

その視線に気づいたユウスケは何も言わずに微笑んでいた。

ユウスケ「士は何も気にしなくていいよ。大したことないし、それに……俺クウガだし！」

士「俺は……お前を……？」

ユウスケ「だからさ、士。今は体を休めて……最後の闘いに備えようぜ。」

士は自分がユウスケを攻撃したことを悟った。自分にも自我がなくなる……その恐怖心が自身の心を埋め尽くしていた。

コウスケ「士が落ちてるなんて……」りしくなござ。落ちてるのはいつも俺の役目だろ?それ……夏海ひやんがすつじく心配してるし。」

夏海に視線を移す士。

士「・・・夏海。」

夏海「・・・つ、つかへん……」士に抱きついて夏海。それに驚く士。

士「な、ナシミカン?……」

夏海「・・・もう・・・戦わないで。」

士「・・・え?」

夏海「・・・もひ士くんが傷つくといひなんて見たくないです・・・」

士は押し黙る。

夏海は涙を流しながら士に訴えてくる。届かないことわかつていながらも・・・。

夏海「もひトイケイドとして闘わないでください・・・」

To be continue...

第十七話 ディケイド激情態（後書き）

仮面ライダーファウンドについて話すのを忘れていたので・・・

仮面ライダーファウンド・世界の創設者が変身した姿。

彼が持っている力はすべてのライダーの必殺技を

彼が持つ剣を使って編み出すことができるとこいつ

最強中の最強のライダーである。

また、一度受けた力を体に吸収させることもできる。

カードを使うところなどは、ディケイドライバーの

力と似ているが、決定的に違うことはそのドライバー自体が変形し、攻撃できること。

技などについては、出てきたときに説明します。

全てを破壊し、全てを繋げ！

第十八話 士の決心、複雑な気持ち（前書き）

・士は立ち直りが早いみたいですね。

25話完結の形が見えてきました。

25話 + エピローグって感じになると思います。

個人的に、こここの話書いて楽しかったです。w

世界の破壊者『ディケイド』。

ライダー大戦の世界をめぐり、その瞳は何を見る？

第十八話 士の決心、複雑な気持ち

夏海が士に叫んでいる・・・。

それを遠田で見つめている渡達原典ライダー・・・。

夏海「無駄だつてわかつてます・・・！でも・・・！もう士くん
が傷つく姿を見ていられないんです・・・。」

士「夏海・・・、悪いが・・・それは無理だ。」

夏海「士くん・・・。」

士「よくわからないが・・・、俺にはまだしなくちゃいけないこと
が残ってるらしいからな。」

そつ言いながら、士はユウスケ、渡、剣崎に視線を向けていく。

士「俺ばかり、落ちてるわけにもいかないみたいだし・・・な、
ユウスケ。」

ユウスケ「おうー！士らしくねえぞー！」

士はゆっくりと立ち上がる。

士「・・・で、その『世界の創設者』についての情報が知りたい。
どうしたら勝てる？」「

渡「それは・・・。」

剣崎「海東大樹ならわかるだろう。あいつ、戦つたはずだからな。」

士「戦つた？・・・一人ですか？」

渡「・・・ええ。でも・・・彼にはインビジブルのカードがあるは
ずなので大丈夫だとは思いますが・・・。心配ですね。」

野上はまだ泣いている夏海を見て悟った。

本当に士さんのこと心配しているんだ、と。
後悔もあるのかもしれない。知らなかつたとはいえ……自分もまた士さんに攻撃してしまつたから。

野上「と、とりあえず、城の中に戻りませんか？海東さんが戻つてきてるかもしれないですし……。」

ヒビキ「それもそうだな。」

天道「……俺たちは間違つていたというのか？」

ヒビキ「いきなりどうしたの？」

天道「……いや、ディケイドを倒そうとしていたことは。間違つてたつてことなのか？」

剣崎「……間違つてたわけじゃない。世界を救う方法に……それがしか思い浮かばなかつただけだ。」

士「……まあ……俺が破壊者なのは本当だからな。」

剣崎「……士。悪かつたな、いろいろ。」

士「……何今更謝つてるんだよ、俺は別に何も気にしていない。」

五代と渡は顔を見合わせていた。

勿論士の立ち直りが早いということに驚いていたのである。

渡「……士さん……もう立ち直りますね。」

五代「すじこなあ……。仲間つてやっぱり最高なお宝なんだねえ……つて。海東くんみたいになつちやつた。」

士達が城に戻ると、城戸が海東と口論になつていった。

城戸「俺はそんなの認めないぞ！！」

海東「だが、これしか方法がないんだ。……あ、士！」

士「海東、ぼろぼろだな。」

海東「ふつ、君もね。」

渡「一体どうしたんですか?」

渡は口論になつていた原因を聞きたす。

城戸「だつてこいつが……創設者に勝つ方法は一つしかないつて言つて……！それで……！」

剣崎「とりあえず、お前は落ち着け。……海東、それは一体何なんだ?」

城戸では冷静に話が進まないと思つたのか、剣崎は海東に問いただす。

海東はため息をひとつついて、士を見た。

士「・・・？」

海東「世界の創設者に勝つ方法は……今のところ一つしか思い浮かばない。」

士「・・・俺なのか?」

海東「ああ。だけど……今の士じゃ無理なんだ。」

海東がうつむきながら、少しずつ話していく。

その様子から、勘がいい渡や五代、そして士は向となくわかつてしまつた。

士「つまり……俺に激情態になれつてことだひづ~」

ユウスケ「・・・? ! ! !」

海東「……はあ。やつぱり士にはわかつちゃつたか。やつだよ。破壊者として目覚めれば……勝てると思うんだけど……。」

城戸「そんの……！駄目に決まってんだろ？！」

士「・・・城戸。」

城戸「だつて・・・。そんな姿にまたなつたら・・・今度こそ壊れちゃうかもしれないんだぞ?ー」これ以上・・・犠牲を出したくないんだよ・・・。」

城戸が涙をひとつ流す。夏海も泣きそうだ。

五代は他にも方法がないか渡と話し合つていたが、すぐに出てくるやうなものでもない。

津上と乾は心配そうな視線を送り、野上はヒビキに支えられていた。天道は悔しそうな表情をしていた。剣崎も・・・同じだ。だが、士だけはすつきりとした表情をしていた。その表情を見たユウスケは嫌な展開が頭をよぎる。

ユウスケ「・・・そこまでしなくちや、創設者には勝てないってことなのかよ。」

海東「ああ。あいつの力は・・・並大抵のものじやない。隙がない。最強のライダーって言つても過言ではないよ。」

ユウスケ「・・・俺の究極の闇の力じやだめなのか?」

五代「小野寺くん!!!!!」

海東「・・・それは・・・。」

ユウスケ「士だけ壊れるなんて・・・俺は見たくない。」

ユウスケの表情は本気だった。だがそれを止めたのは士自身だった。

士「ユウスケ、もういい。」

ユウスケ「なんでだよ!ー」

士「もうこれ以上お前に迷惑かけたくないからな。」

ユウスケ「仲間なんだから、迷惑かけて当然だろ?ー」

夏海「・・・士くん・・・考え方直して・・・。」

士「・・・すまん、ナツミカン。」

渡「……士さん。本気なんですね？」

士「ああ。……今度俺が壊れたら、本氣でつぶしてもうひとつ構わねえよ。創設者さえ倒せばいいんだろ?」

渡「……ええ。ですが……」

士「……俺もいなくなつたほうが世界にはいいってもんだ。」

士の意志は固かつた。渡達はどうにかして彼の意志を曲げようとしたが……無理だった。

士「……俺は激情態になる。そして……世界の創設者を破壊してやる。」

To be continue...

第十八話 士の決心、複雑な気持ち（後書き）

うーん・・・。

前書きにも書いたように、この小説は25話で完結します！
あと少しですねー・・・。

最終的に、どうぞな小説にならないように頑張らないと…
あ、リイマジライダー出しますー！（爆
最後の方だけなんですね！）
これだけ予告しておこうと思つて…。（笑

全てを破壊し、全てを繋げ！！

第十九話　いざ、最終決戦へ・・・（前書き）

なんていうのか・・・土つて弱いのか強いのか
わからなくなつてきております。
いや、強いとは思つんですが・・・自分が書く士は
基本弱つちいんですよねー・・・
まあ・・・とりあえず十九話です。どうぞ。

世界の破壊者ディケイド。
ライダー大戦の世界をめぐり、その瞳は何を見る？

第十九話　いや、最終決戦へ・・・

部屋の中は騒然とした状態となっていた。

渡や乾、ヒビキ、五代はもう何を言つても彼の意志は変わらないと思つていたから、特に何も言わなかつたのだが、野上や城戸、ユウスケ、夏海などは必死に彼を止めようとしていた。

「破壊者」・・・ディケイド激情態となることを。

夏海「士くん！ 考え直してくださいー！ー！」

士「だつたら・・・。他に何かいい方法があるのか？世界の創設者を倒す方法が・・・世界を救う方法が！ー！」

夏海「それは・・・その・・・！」

士「・・・なら俺がやるしかない。俺がやらなきゃ 何も始まらない！世界が終わるだけだ。」

城戸「・・・ちっくしょう！・・・なんか他にいい方法がねえのかよ！ー！くそおー！」

剣崎や天道はその様子をじっと見つめていた。

彼らもまた・・・何かほかの方法を探しだそうとしているのである。

剣崎「・・・士、お前・・・今度歯止めが利かなくなつた時はどうするつもりだ？」

天道「俺に戦いを挑んできた場合は容赦なく倒すぞ？」

士「ああ、それでいい。」

ユウスケ「士？！お前・・・何言つてんだよーーー！」

士はユウスケのほうを見なかつた。

戦いに備えるために、ヒビキや津上に傷の手当をお願いしようと

していた。

そんな様子を見たユウスケは士に訴えようとした。・・・その時。

夏海がユウスケの前にたつた。

ユウスケ「・・・ 夏海ちゃん・・・。」

夏海「士くん・・・。どうしてあなたは・・・どうしてあなたはいつも自分の心配をしようとしてないんですか！――！」

士「・・・。」夏海の声に士は足をとめた。

夏海「周りの心配ばかりして。世界のことばかり・・・私たちのことばかり・・・少しほは自分のことだって心配してください・・・。」

士「俺はどうだつていい。俺には自分の世界が見つかっていないからな。」

夏海「でも！」

士「お前らには帰るべき世界があつた。それなのに・・・俺やその創設者のせいで世界が消滅されてしまつたり・・・消滅されようとしている。だつたら俺がけじめつけるのが当然だろ。」

夏海「・・・そんの・・・！そんの間違つてます！――！」

士「どこが間違つてるつていうんだ。」

夏海「・・・それは・・・。」

士「俺が言つたこと・・・間違つてるか？」

ユウスケ「・・・間違つてる。」

士「・・・。」

ユウスケが夏海の隣に立つ。

ユウスケ「士は間違つてる。お前は・・・お前は一人で戦おうとしてないか？一人で向き合おうとしてないか？・・・一人で背負いこもうとしてないか・・・？俺達・・・仲間だろ？仲間なら一緒に戦

うのが当然だし……みんなで背負いこむのも当然だ。……少し
は俺らを頼れよ。」

士「・・・コウスケ。」

ユウスケ「やつぱりお前だけに嫌な思いをさせるわけにはいかない
よ。」

士「究極の闇になるつもりか?」

ユウスケ「・・・ああ。」

士は今まで彼らに背を向けていたが、振り返りユウスケの目を凝視
した。

彼の目・・・ユウスケの目は・・・『本氣』をあらわしていた。
しかし、士は否定した。

士「だめだ。」

ユウスケ「・・・なんでだよ」

士「お前までなつたら・・・俺を止める奴がいなくなるだろ。」

ぼそっとそう呟いて士は部屋を出て行つた。

ユウスケはその場所に立ち尽くしている。

天道はあきれた表情をしながら「結局は生きたいといつことだ」と
つぶやいていた。

ユウスケ「・・・士・・・。」

その日の晩、渡と剣崎は士を呼び出していた。

士「・・・なんだ、頼み」とつてのは。」

剣崎「悪いな、いきなり。」

士「いや・・・別にかまわん。」

渡は士に一枚の紙を差し出した。

そこに書かれていたものを見て、士は驚愕した。

士「・・・これは・・・！」

渡「僕たちが必死に考え抜いて答えを出した結果です。あなたには『これ』を約束してもらいたい。」

剣崎「これしか・・・思いつかなかつたんだ。」

士「・・・ちつ。」

士はその紙を手で握りつぶした。

渡はその様子を見て、ため息をひとつついた。

渡「やつぱり・・・ダメですか。」

士「俺はもう決めたんだ。あんたはわかつてると思つてたけどな。」

渡「すみません。今まであなたにしてきた罰を少しでもつて・・・。」

士「罰?・・・お前、そんな風に思つてたのか。」

渡「・・・はい。」

士「・・・つたぐ。リーダーのお前がそんなんだからまともられないんじやねえのか?」

渡「承知します・・・。」

剣崎「おい、あんまり渡を責めるなよ。」

士「責めてはいない。からかってるだけだ。」

剣崎「・・・一緒だ!!--」

渡達の頼みごと。

それは『ディケイド激情態にならずに戦つてはもうれないだらうか』
といふもの。

その紙には彼らが考へに考へた他の方法が並んでいた。

士「・・・ちよつとまで。つてことは俺が出会つたライダー達はまだいるつていうのか？」

渡「・・・ええ、あなたには黙つていましたが。」

士「はあ。お前、もつと早く言えよ、それ。」

士は渡の行動の遅さに呆れかえつていた。
だが、そういうしている場合ではない。
戦いはもう田の前まで来ているのだ。

士「・・・で、そろそろ暴れるとするか。」

そして、最終決戦が幕を開ける・・・

To be continue...

第十九話　いや、最終決戦へ・・・（後書き）

なんていうのかなあ。

やっぱり士は自分のことも考えてるといつかなんといつか。
結局は彼も一人の人間なわけで。

でもやっぱり自分のことよりも仲間のことを大事にしている
つてところも、TV版最終回に近付くにつれて垣間見ることができますよね。

そういうところが出来ていればいいな、と思つております。
それでは、第二十話で会いましょう。

全てを破壊し、全てを繋げ！

第一十話 「破壊者」覚醒（前書き）

DVD見ながら書いているので、

文章がばらばらな気がしています（ ）

まあ、流れ的にできていればいいかな（ ）笑

それでは、二十話です。

ちなみに五代クウガは「G/U/クウガ」と表記しています。
ユウスケのクウガはそのまま「クウガ」の表記です。

世界の破壊者ディケイド。

ライダー大戦の世界をめぐり、その瞳は何を見る？

第一十話 「破壊者」覚醒

そして、士たちは「世界の創設者」を呼び出すことに成功し、決戦の時が来た。

渡「士さん、いいですか。最初からなろうと思わないでくださいよ？」

士「……俺もいつなるかわからんねえんだよ。」

渡「……え？」

士「前回も、……急になつたんだ。」

剣崎「……ちつ、面倒だな。」

士たちが歩いていくと、荒野の真ん中に一人の男が立っていた。海東は反応した。その反応を見て、ここにいる全員が理解した。

『あれ』が世界の創設者なんだと。

創設者「……きたな。」

士「お前が世界の創設者とかって奴か？……不気味な格好をしてやがるな」

創設者「そうだ。……我の姿を見たものは誰もいない。」

士「……うかよ。だが……そんなことは関係ない。さつわと片付けてやるぜ」

〔KAMEN RIDER〕 士「变身!」 〔DECADE!〕

創設者「……ほつ。……いつ覚醒するか見物だなあ。」

〔KAMEN RIDER〕 創設者「変……身。」 〔FOUN

D—！」

海東「じゃあ、僕らも行くか。」

コウスケ「ああ—！」

〔KAMEN RHDE〕

全員「変身—！」

士たちは創設者の攻撃に翻弄されていた。

D C D 「ちくしょう—！」こつ、ふざけてやがる—..」
D E D 「油断も隙もない・..。」からりも氣を引き締めていかない
とね。」

クウガ「そうだな！超変身—..」

クウガはアルティメットフォーム（赤田）へと変身した。

原典ライダー達は最終形態へと変身。夏海は遠田から士たちの様子を見ていた。

夏海「・・・士くん—..！」

龍騎 S「つあああ—..！」

変身がとけ、倒れこんでしまう城戸。

剣 K「城戸—..ぐあああ—..！」

それに気をとられてしまい、ファウンドの攻撃をとめることができ

ず、変身も解けてしまつ。

FOUND「ふつ。お前らライダーたちの力はそんなものか。大したことないな。」

剣崎「ちつ・・・! (体が思うように動かない・・・。)」

天道はハイパー・ゼクターを使い、少しでも攻撃をとめようとした。

FOUNDED 「無駄だ。」

[ATTACK RIDE HYPER CLOCK UP!] [

ファウンドもまたハイパークロックアップの世界へと消えた。その間に、ヒビキに守られていた野上やそのヒビキに攻撃しながら。

電王「うわあーーー！」
響鬼「うおーーー！」

キバ E 一 良太郎くん！ ヒビキさん！！

良太郎は氣を失い、ヒビキは変身は解けなかつたものの、息が上がりつてゐる。

[C L O C K O V E R] [C L O C K O V E R]

カブトヒ・・・・・くつ・・・・!』

FOUNDO「カブト・・・お前ならもつと我と遊んでくれると思つたんだがなあ。」

ファウンドはそのままカブトの首を絞め、そして投げ飛ばした。

カブト曰く「うああーーー！」

そのまま変身がとけてしまった。

キバ E 「つ！！天道さんまで・・・！」

キバツト「渡、俺たちも行くぜ!」「

キハ E- · · · ああ !

タツゴット「カハイクアツ

[ATTACK RIDE FREEZE--]

キバツ「・・・え?」「キバツト「や、やべつ!-!-!」

《大きな爆発音》

キバの変身が解けてしまい、倒れこむ度。

その近くにはほかのライダー達が倒れこんでいる姿が五代には見えていた。

今はユウスケや海東、そして士が3人がかりで戦っていた。

「五代かあいつ隙がねえ。」

G／U／クウガ「ええ・・・。厄介なカードを持っているようです
し。」

DED「話している場合じゃないよ・・・・・ぐあー・・・」

DCD 海東！！すまん！！

夏海はただ祈つていた。

士が「破壊者」に覚醒しなによつて・・・。

自分はまともに戦うことできぬ。だから祈ることしかできない。

夏海「土くん・・・ユウスケ・・・大樹さん・・・五代さん・・・！」

D C D - ' D E D - ' G / U / クウガ - ' U クウガ 「うわああああああ！」

彼女の祈りも届かず、一方的にやられるだけの士たち。そのまま変身も解けてしまった。

響鬼「だ、大丈夫かあ？！」

五代「エビキさんーー。エビキさん」いや、平氣・・・じやないようで

響鬼「ああ・・・さすがにね、ちょっときつい。」

ユウスケ「くそ……！」

FOUNDRY . . . やはり、普通の状態では遊び相手にはなら

ないようだ。

十一

海東と共に、だめだ！！！あいつの話を絶対に聞くな！！！」

FOUNDRY . . . ほつ。ディエンド . . . 世界の修復者は望んで

いないのか？我を倒し・・・世界が救われるのを？」

海東「そ、それは・・・。」

「我を倒す」ことができるかもしないのは。そやつが破壊者となるしかないので。我もそのほうが面白く戦えるからなあ。」「ユウスケ「士・・・・・。」

ファウンドは遠くで見ている夏海に視線を移した。そして、ニヤリと笑った。

その笑いに気づいた五代は、夏海に向かつて叫んだ。

夏海さん！！逃げて！！」「五代一

FOUNDRY

「やめう……」
海東・五代「

士は何が起きているのか一瞬わからかねた。
だが、ファウンドが立ちすくんでいる夏海のほうへ向かっているの
を見て・・・。

士 や く ！

FOUND「レ」、破壊

消滅してしまうぞ。

夏海「…………つ、土くん!! 助けて…………」

夏海の叫び声がする。

・・・・・あれ、俺はなぜ動かないんだ・・・?

FOUND「をよつなり、お嬢さん？」

夏海「ひつ……いや……」

ヒビキや五代、海東が夏海を助けようと走っていくが間違いなく間に合わない。

ユウスケは土の様子にあせっていた。

ユウスケ「士……正気に戻れ……」

FOUND「そして、破壊者ティケイド、こんじけま……。」

ファウンドが夏海に向かって剣を振り下ろした……いや、振り下ろされることはなかった。

夏海が田を開けると、田の前には土が立っていた。

夏海「……つ、士くん……？」

士（破壊者）はニヤッと笑い、その剣を押し返した。

FOUND「……ほつ。ようやく我の遊び相手ができるなあ。」

海東、ヒビキ、五代、ユウスケ「……」

夏海「……士くん……！」

士「俺は破壊者、悪魔だ。俺に触れるものはすべて破壊する……。

「

To
be
con-
tin-
ue...

破壞者

覺醒
·
·
·

第一十話 「破壊者」覚醒（後書き）

今までで一番長文になつた気がします。
覚醒しちゃいましたよー。

もうね、次回の話にはやく
更新したくてたまらないんです（（爆
もしかしたら、今日の夜に衝動的に
更新している可能性が（（笑

それでは、次回もお楽しみに！（駄文を）

すべてを破壊し、すべてをつなげ！

第一十一話 士を止める（前書き）

なんかこんなタイトル何かにありますね（（笑
今回はとにかく暴走した士を誰か止めてくれーって話です。
まあ、簡単に言えばそういうことですーー！

ユウスケって五代さんと一緒に偉大だなあって
思いますよ、ほんとに・・・（本編では情けない役になつてたけど）
それでは第一十一話ですーーどうぞーー！
(ディケイドB ディケイド B BREAKERの略です)

世界の破壊者=ディケイド。

ライダー大戦の世界をめぐり、その瞳は何を見る？

第一十一話 士を止めろ！

士にとうとう「破壊者」が覚醒してしまった。

だが今はまだいい。彼の眼には「創設者」しか映っていないからだ。
渡「……この光景、敵が違いますけど以前の闘いで見たことがありますね。」

そう渡がつぶやいた。

五代は思い出していた。その時の闘いのことを。

自分は最後まで戦わなかつたけれど、今の状況は……

五代「（同じだ。あの時も夏海さんに危害が加わって……。）

剣崎「あいつが、こちらに視線を向けたとき。俺らはどうするんだ
？」

天道「決まってるだろ？ 倒す。それだけだ。」

城戸「待ってくれよ！ あいつ、絶対に前回よりも強くなってるん
だぜ？ ! 前回もボロボロだつた俺らが・・・ 今勝てるわけないじゃ
ねえだろ？ !」

天道「そんな」と言つてるが、お前はあいつに情を持つんだろう
？ だから倒せない。だからお前は甘いんだ。」

城戸「うるせえ！ 大体・・・ ライダー同士がつぶし合つこと自体間
違つてるんだ。俺の世界も・・・ そうだった・・・ 俺は、人間と
闘うためにライダーになつたわけじゃない。モンスターから人を守
るためにライダーになつたんだ！」

剣崎は思った。城戸は優しい。優しいからこそ破壊者とか関係なし
にそういうことを言えるのだと。

破壊者でも・・・一人の人間には違いないのだから。

津上「皆さん！」

天道「津上、おまえどこに行つてたんだ？」

津上「野上さんを運びに城へ・・・、ヒビキさんも一緒にです。」

乾「で、どうだ？ 状況は？」

渡「士さんが破壊者へと覺醒しました。」

乾「・・・そうか。海東たちはどうした？」

五代「あそこにはいます。」

五代が指をさした場所。

それは士と創設者が対峙しているすぐ近くだった。そこには海東、ユウスケ、そして夏海もいた。

それを見た乾は驚いた。

乾「馬鹿！ ライダーになれるやつはまだしも、なんで光夏海まであることにいるんだよ！」

五代「一步も動こうとしなかつたんです。危ないから城に戻りまして俺が言つたんだけど、無視されちゃつた。」

城戸「それに一応あの子もライダーになれるみたいだけど？」

乾「キバラの消息がつかめない中、無理に決まつてんだろうが。キバツト」そういうえば見ないな、渡、俺ちよつと探してくる

渡「え、ちょ！ キバツト？」

天道「・・・自由だな。」

ディケイドとファウンドの闘いは互角、いや、少しだけディケイドがおしてこるようにユウスケ達には見えていた。

ファウンド「……っ、なかなかやるな。」

ディケイドB「ふんーお前の力はこんなもんなのかよーー。」

〔ATTACK RIDE SLASHーー〕

ディケイドB「うわああーー。」

ファウンド「ぐうつーー。」

コウスケは目を見開いて驚いていた。

今まで全く歯が立たなかつた攻撃が、士が破壊者になつたことでファウンドの体に傷をつけることができているのだ。
そしてファウンドは息が上がつているのに対し、ディケイドは全く上がりつていない。寧ろ笑つてゐるよう見えた。少しだけ恐怖を感じた。

コウスケは思った。「の十を止めないとはできるのだらうか」と。

ディケイドB「もう終わりなのか?つまらないな。もつと俺と遊んでくれよ。」

ファウンド「ちつ。我は「こんな」とではなくたばりんーはあーー。」

〔ATTACK RIDE ONGEKHBOU・REKKAA!〕
〔ATTACK RIDE STEAL VENT!〕

ファウンド「な、なんだと?」

ディケイドはスチールベントで音撃棒 烈火を奪い取つた。それを遠くへ放り投げ、カードをドライバーに差し込む。

ディケイドB「終わりにしようぜ?」

「FINAL ATTACK RIDE DECADE BREAKER！」

ファウンド「へつー」

「FINAL ATTACK RIDE FOUND!..」

大きな爆発音

海東らが爆風をよけ、静まつたところで目を開けると・・・
ディケイドがこちらを見ていた。そしてにやりと笑いながら
ディケイドB「今度はお前らが相手か?」
と言った。

海東「くつー小野寺くん、ナツメロンを遠くへー!」

ユウスケ「海東は?！」

海東「少しでも足止めするー!」

ユウスケ「だけど!ー!」

夏海「私はここにいますーここに残りますー!」

海東「ナツメロンー何言つてるんだーー!」

夏海「・・・私が土くんを止めるんです。止めなきゃいけないんですね!」

その騒ぎを聞きだしたのか、原典ライダー達も集まつてきていた。

天道「やはり、きたか。破壊者・・・ディケイド。お前は俺が倒す。

「ディケイドB「ほつ。カブトか。かかつてこい。」

城戸「や、やめろよ！お前ら！…」

ディケイドB「お前は龍騎だつたか…。一人がかり、いや、三

人がかりでもいい。誰でもいい。俺と遊べよ。」ヤツ」

海東「僕が行く。士、覚悟したまえ。」

夏海「…やめて…士くん…。」

ユウスケ「…士…、お前…本当に…」

ユウスケ達の目の前で今から起らんとしていること。
これこそが「ライダー大戦」ともいうべき戦いであろうか…。

夏海は見ていた。夢と同じ…いや、以前のライダー
大戦と同じ。

夏海「（どうして…。どうしてならなければいけないの？）

「

創設者はこの光景を笑いながら見つめていた。

創設者「我をここまで追い詰めさせるとは、あやつの力は本物だと
いつ」とだな。」

そして目線を夏海に向ける。

彼にはひとつ、疑問に思つてゐることがあつた。

『なぜディケイドはこの女に執拗に執着するのであらうか』といふ
こと。

創設者「人間といふいきものは誰かと助け合いしなければ生きていけない、ということか。あやつにとつて、そこまでも思わせるこの女の魅力はどこにある？」

破壊者「ティケイド。

彼を止められるのは、誰だ・・・

To be continue...

第一十一話　トを止めし（後編）

やつぱりこの田のひでに更新します

二十一話。いかがでしたでしょうか。

個人的にはすごく荒々しい表現になってしまったかな、
と思っているんですが・・・。どうでしょう？

戦闘シーンは難しいですね・・・、がんばらないと！

では、また次回お会いしましょう！

全てを破壊し、全てを繋げ！！

第一十一話 ひとつの中（前書き）

なんていうのか。

こういう展開になるのを自分でも予想していなかつたというか。

まあ。とりあえず「十一話」見ください。

世界の破壊者ティケイド。

ライダー大戦の世界をめぐり、その瞳は何を見る？

第一十一話 ひとつの中

そこからの展開は目に見えていた。

ライダー達は土（破壊者）にことじ」とく倒されていった。
なんとかして『ディケイド』をとめなければ…と考えている五代や渡だ
つたが、突破口が見出せない。

そんなとき、ユウスケは突拍子もないことを言い出した。
そして、失敗すれば自分にも大きなダメージとなるような…。

ユウスケ「俺があいつをとめます。」

五代「ユウスケくん・・・どうやって？」

ユウスケ「もちろんクウガで、ですよ？俺の命に代えてもあいつを
とめないと・・・！あいつしか創設者を倒せないんだから。」

創設者を倒すには確かに『ディケイド』の力が必要だ。
でもそれは・・・『破壊者』としての『ディケイド』なのではないか・・・

・と思つた渡。

だが目の前の男は「とめる」と断言している。
自分たちが躊躇している中…。

渡「一人では無謀です！僕たちも・・・」

ユウスケ「いえ、俺だけで十分です！」

ユウスケはクウガに変身し、『ディケイド』の元に走つて行つてしまつ
た。

渡と五代も考えているだけでは埒が明かないと考え、二人も『ディケ
イド』の元へと急いだ。

夏海はただ呆然としていることしかできなかつた。

士を救いたい、でも自分にはその力を持つていない……。キバー・ラの姿も見えないし、生身の人間が近くに行つてはいけないことくらいわかる。

ただ祈ることしかできない。無力の自分には……。そのとき、夏海の前にユウスケの姿が見えた。ユウスケは士を救うことができる……。

夏海「私には……何かできることはないんでしょうか……。見ているだけなんて……。」

D C D・B 「……偽者か。」

ユウスケが変身したクウガを見てそう呟くディケイド（破壊者）。それに反応したのが五代だつた。

G／U／クウガ「小野寺くんは偽者なんかじゃない！」

D C D・B 「所詮パラレルワールドの人間だろ。」

ユウスケは特に気にしていなかつた。

目の前にいるディケイドは士じやない、と思っていたから。とにかく士を取り戻せばいい、それだけがしなければいけないことがなのだ。

まだ近くには創設者だつている。だが今の状態ならまだ攻撃してくることはないだろう。

ディケイド（破壊者）から受けた攻撃がまた癒えていないからだ。

クウガ「士……はやく戻つてくれ……お前がするべき」とはこ

んなことじゅないはずだ！！」

ＤＣＤ・Ｂ「うるさい。」それでもへりつとか。」

〔ＡＴＴＡＣＫ　ＲＩＤＥ　ＯＮＧＥＫＩＢＯＵ・ＲＥＫＫＡ！！〕

ＤＣＤ・Ｂ「ハアアア！－！」

クウガ「うわああ！－！」

思い切り跳ね飛ばされてしまつコウスケ。しかしそくに体勢を立て直し、再び突っ込んでいく。

キバＥ「小野寺さん！やみくもに突っ込んでいくだけでは傷つぐだけです！」

カブトＨ「そうだ！少しは整えてから・・・」

クウガ「ダメなんです！それじゃあ土は戻つてこない！・・・俺が、俺があいつをとめなきゃいけないんです！超変身！－！」

コウスケはアルティメットクウガへと変身し、ディケイドを攻撃する。

しかし、ディケイドはそれを難なくかわし、次のカードをドライブ一へと差し込んだ。

〔ＡＴＴＡＣＫ　ＲＩＤＥ　ＢＬＡＳΤ！－！」

コウスケはその何弾かが自分の体に直撃したが、もろともせずディケイドの体を殴つていく。

ヒクウガ「はああ！－！」

ＤＣＤ・Ｂ「くつ－－やんな－－おつやあ－－－！」

戦いは「ディケイド」（破壊者）VS小野寺クウガの一騎打ちとなつて
いた。

ほかのライダー達は攻撃をできずにいた。この一人の気迫のせいで・
・。

そのころ夏海はより近くへと近づいていた。

その後ろにはヒビキがスタンバイ。いつ何時創設者が行動を移すか
わからないからだ。

ヒビキ「夏海ちゃん、これ以上前に行つたらダメだよ？」

夏海「そんな・・・！私だつて土くんをとめられます！！」

ヒビキ「気持ちわかるよ。でも・・・君が行つたら余計に小野寺
君が負担になるつて事、忘れちゃだめだからね？」

夏海「自分の身は自分で守ればいいんでしきう？」

ヒビキ「ちょ・・・！夏海ちゃん？！だめだつてばーーー（また剣崎
くんに怒られちやう・・・）」

夏海はどんどん「ディケイド」とクウガの元へと近づいていく。
そして彼女の足が止まつたとき。

「FINAL ATTACK RIDE DECADE BREAKER！」

二人の必殺技がお互いに決まった。あたり一面大きな爆発が起る。
夏海が少し体をくぬめ、爆発がおさまったとき目を少しづつ開ける。
すると目の前には倒れているユウスケとそれを見下ろす「ディケイド
が立っていた。

夏海

D C D • B 「まだやるのか?」

ユウスケ「…………、士あ…………！俺は世界中の人の笑顔を守るつて……クウガの世界でお前と、そしてあねさんと約束した……！だから……！お前の笑顔だつて……夏海ちゃんの……笑顔だつて……、守らなきやいけないんだ……！」

その必死の訴えに、ディケイドに異変が起きた。

「ユウスケ「・・・、士あーーーお前俺に言つてくれただろ・・・!
?俺の笑顔を守つてくれるつて・・・!だから・・・!戻つて来い
よ・・・!士!—!—!」

その様子を目にした夏海も、デイケイドに訴える。

夏海「土君！！私は・・・！土くんが破壊者じやないって・・・信じます！絶対に・・・！だから・・・！土君！！！！・・・世界を・・・世界を救ってください！！！」

夏海一
十一君

ディケイドが変身をとき、倒れこむ土。それを支えにいく夏海・・・

ユウスケも土の下へ近づいていった。

夏海「士君……！」

士「・・・な、ナツミカン・・・?」

ユウスケ「士!！」

士「・・・ユウスケ・・・、俺・・・何を・・・。」

夏海「よかつた!!士君!!!!」（抱きしめる）

士「うお!!な、なんだなんだ・・・!!」（／＼／＼／＼／＼）

ユウスケ「つかさああああああ!!」（号泣）

士「・・・、迷惑かけたな。」

ユウスケ「何言つてんだよ!!」

創設者「・・・結局正氣に戻ってしまったというわけですか。」

士「、創設者!..」

創設者「・・・もう我に勝つ」とはできない!..

五代「それはどうかな?」

五代の声がする。

そのほうを見ると、五代の後ろには士たちが出会った8人のライダーが集結していた・・・

To be continue..

第一十一話 ひとつの一聲（後書き）

さて、駆け足でお届けしています！

第一十一話！いかがでしたでしょうか？

えつと、時間がないので今回のあとがきは
これだけで、「勘弁を（爆）

すべてを破壊し、すべてをつなげ！

第一二三話 平成ライター集結せよ（前書き）

結局出したやいましたよ・・・
もづけいやじゅしてますが、
許してください。（汗）

つていうか、あの・・・。

「ソウジってクロックアップの中から
出られないんじゃなかつたつけ」と
思つた方は、そのこと無視してください。（爆）

（とつあえず、表記はいつもとおり
原典の場合は最終フォームの頭文字が
ライダーの名前の前や後についています。）
それでは、第一二三話をお楽しみくださいませ

世界の破壊者、ティケイド。

ライダー大戦の世界をめぐり、その瞳は何を見る？

第一十三話 平成ライダー集結せよ

士の前に見知った顔が8人並んでいる。

仮面ライダーアギト・・・芦川ショウイチ。

仮面ライダー龍騎・・・辰巳シンジ。

仮面ライダー555・・・尾上タクミ。

仮面ライダー剣・・・剣立カズマ。

仮面ライダーヒビキ・・・アスム。

仮面ライダーカブト・・・天童ソウジ。

仮面ライダー電王・・・モモタロス

仮面ライダーキバ・・・ワタル。

カズマ「チーズ!!チーズ!!!!」（士に抱きついてくる）

士「お、おい!!カズマ、離れろ!!それからチーフだ!それにもう俺はチーフじゃねえ!」

アスマ「士さん!師匠!」

海東「少年くん!」

ワタル「ユウスケ!!士さん!」

ユウスケ「ワタルー!!」

感動の再会、といったところか。

その様子を微笑みながら見つめる夏海。

そしてモモタロスの姿を見て驚いている野上良太郎。

野上「え・・・?な、なんでモモタロスが・・・?!

モモタロス「はあ?!誰だてめーは!」

野上「え・・・!えつと・・・その・・・」

海東「このモモタロスは君の知っているモモタロスじゃない。」
モモタロス「あ、てめーはーあの時のーー泥棒野郎じゃねえかーー！」

タクミ「夏海さんー！」

夏海「タクミくんーお久しぶりですねーーコリナちゃんは元気ですか？」

タクミ「はーー！」

シンジはその様子を遠くから見つめていた。
それに気づいたソウジとショウイチが近寄る。

ソウジ「どうした？お前は行かないのか？」

シンジ「あ、どうも・・・俺、タイムベントの関係で土しか存在
を知られてないというか・・・」

ショウイチ「別にいいじゃねえか。」

シンジ「え？」

ソウジ「俺たちは仲間だ。それだけで十分だろ？？」

渡「感動の再会も、ビリヤリまともにこなしてもらえないみたいですね。」

渡がそうつぶやくと、ここにいる全員がその方向に視線を向けた。
そこには仮面ライダーファウンドが立っていた。

カズマ「なんだよ、あいつーー！」

シンジ「・・・敵・・・か？」

士「世界の創設者・・・ってやつらしい。」

カズマ「や、創設者・・・なんだそりや。」

士「お前らの世界、いや・・・すべての世界を創り出した奴だよ。」

あいつを倒せば、世界は救われるらしい。」

アスム「じゃあ……僕たちの仲間も元に戻るんですか？」

海東「……ああ。戻るさ。」

ワタル「なら、戦うしかなによりますね……！」

ソウジ「……なんだか相手の様子が変だな。」

ショウイチ「天童もそう思つか？俺もそう思つ。まあ……」

ソウジ「カブトの『ショウイチ』『アギトの』

ソ・ショ「『勘だけどな』」

ユウスケ「……』の一人、何気ない『コンビだな……。」

士「とりあえず……今は……創設者を倒すことだろ。」

士たちは創設者 仮面ライダーファウンド に視線を移した。

FOUND「私は貴様ら」ときに負けるほど弱くはない。」

士「』の人数だぜ？お前に勝ち田はあるのかよ。」

FOUND「ふん。我的新の姿をお前に見せてやるつ。」

「KAMEN RIDER FOUND FINAL!-!-」

士「ファインアルだと?…!」

FOUND-F「ふははは……』の姿になつたとき、お前らの負けが決ました。」

渡「そつとは限りません。僕たちは仲間です。仲間の力のす』さをあなたは何もわかつていないよつですね。……士さん…これを使つてください。」

士「……』は、鳴滝が持つていた……。」

渡は士に鳴滝の所持品であるひとつのかメラを差し出した。

渡「これを使えば、仮面ライダー＝ディケイド・ファイナルになることができます。」

士「……なるほど。大体わかった。……お前ら、準備はいいか？」

ユウスケ「ああ！…いつでもいいぜ！…」

ほかのライダーたちも大きく頷いた。

士「それじゃあ……行くぜ！…」

「KAMEN RIDE」

「KAMEN RIDE」

キバット「渡、キバッていぐぜー！」

キバット「ワタル、こっちもキバッていぐぜー！」

ライダー達「変身！…」

「DEC ADE FINAL」！…

「DEEND！」

平成ライダーたちが一列に並んだ。

モモタロス「よっしゃ！…いくぜいくぜいくぜー！…！」

先陣はモモタロス。その後ろには城戸が変身する龍騎やカズマが変身する剣が続く。

要するに・・・熱血タイプが先陣を切った、ということか。

ファウンドはその場を動かなかった。

彼らの気迫に押されているのではない。寧ろ、誰かが来るのを待つ
ている・・・そんな感じがひしひしと伝わってきていた。

モモタロスーおりやあああああー！」

龍騎 S - おりやあああ!!!

剣 おりせあああーー！」

ファウンドは仮面の下でニヤツと笑い・・・彼らの攻撃をそのまま押し返し、そのほか近くにいたライダー達をも巻き込むほどの力で吹き飛ばした。

ライダー達『うわあああ！！』

カブト「…………くつ、なんてパワーだ……！」

卷之三

DUD\EF\ . . . \<\<\<N\ . . . -\'

ファウンドは倒れているティケイドの横に立つ。

そしてそのまま土を蹴り飛はした

その衝撃で変身が解けてしまった。

井上久美子

FOUNDRY . . . やはりお前は弱いな。

士「あつ・・・ま、まだ・・・終わってないぜ・・・！」
FOUND「そんな姿でどこに戦う力が残っているって言つんだ。
だったら・・・これで終わりにしてやるわ。」

「FINAL ATTACK RIDE FOUND FINAL
!-!-」

士はまずい、と思った。

この攻撃をまともに受けたら・・・最後だ。

どうにかして逃げようと努力するが、体が思うように動かない。

士「（悔しい・・・俺の旅は・・・ここで終わりなのか・・・）」

FOUND「我的力で死ねるのだ。ありがたいと思え。」

すると・・・

士の瞳には・・・ひとつ目の光が映りだされていた・・・

To be continue..

第一二三話 平成ライター集結せよ（後書き）

ファウンド、めつちやむかつくんですけど（（爆
あ、いきなりすみません。水城柳羅です。

自分で書いて思つんですけど・・・

創設者の言い方、なんか気に障る言い方ですよねー・・・
書いて苛々していくんですよー！

次回で・・・こんな最強ライダーとも・・・？？

とまあこれ以上いうとダメなので、やめておきます。
それでは、次回二十四話ををお楽しみに。

すべてを破壊し、すべてをつなげ！！

第一十四話 戦いの終わり・・・（前書き）

さて・・・！

とうとう、一十四話まできました！

そして、戦いの終わり。

世界はどうなるのか。士たちの運命は？！

後書きにこの小説完結後のことについて

話すつもりですので、最後まで読んでくださいね！

それでは、第一十四話をお楽しみください

世界の破壊者、ティケイド。

ライダー大戦の世界をめぐり、その瞳は何を見る？

第一一十四話 戦いの終わり・・・

士の前に一つのまぶしい光が放たれていた。

そしてその光があさまたとき、そこには・・・

士「・・・コンプリートフォーム・・・か？」

士がそれを持つと、そのままディケイドに変身していた。

そのディケイドの姿は・・・

ファイナルディケイドとも違う。ディケイドコンプリートフォームとも違う。

していつのであれば・・・

『仮面ライダーファイナルディケイド コンプリートフォーム』

であろうか・・・。

FOUND/F 「そ、その姿は・・・！」

DCD/F/CF 「・・・ファイナルディケイドコンプリートフォーム・・・」

その姿を見た創設者は、少し動搖する。

士の心の奥底に何かが訴えかけるような・・・そんな感じが士はじていた。

そして士は確信する。

士「（このバトル・・・勝てる。）」

DCD/F/CF 「この戦い、一人で戦わせてくれ。」

D E D 「つ、士? 何言つてるんだ?」

D C D / F / C F 「誰も手を出さな。」

その気迫に押されて、誰も動かなかつた。

その様子を見た夏海は不安になつた。

夏海「・・・士くん・・・」

D C D / F / C F 「ファウンド。お前が糸がつてるのもこれでしま
いだ。いくぜ!」

カズマは氣まずい思いをしていた。

こんな思いになるくらいなら、士と一緒に創設者と闘いたい・・・。
そんなことを思つていたのには理由があつた。

カズマの隣にワタルがいたからである。

ワタルとはライダー大戦の時に自分の世界を守るために戦つた相手
で。

自分は彼の仲間を倒し、ワタルは自分の仲間を倒した・・・。

そういうことから、カズマもワタルも気まずかつた。会話もない。
それに気づいたのは目の前にいたタクミとシンジだったが、特に何
も言わなかつた。

というより・・・何も言えなかつた、と言つた方が正しいであらうつ
か。

そのまま一人は士と創設者の闘いの方へ視線を向けていた。

カズマ「・・・な、なあ! !

ワタル「・・・は、はい?」

カズマ「……この間は……すまなかつた。」

ワタル「……え？」

ワタルはカズマのその一言で、少しだけ緊張がゆるんでいた。

カズマ「いや、……あの時は俺の世界のことしか考えられなかつたんだ。だから……しばらく氣まずくてさ……、はは……。」

ワタル「それは、僕も同じです。」

カズマ「そ、そつか……！」

カズマ「それ、言つたら俺だつてお前の仲間を……。」

ワタル「僕は……カズマさんの仲間を倒してしまつたし……。」

その二人の様子を遠田から見ていた剣崎と渡は、お互に微笑み合つていた。

シンジ「ようやく解決ー？」

カズマ「え？」

タクミ「二人ともす、ぐ気まずそうだったから、こいつらも気まずかつたんですよ。」

ワタル「そ、そうだつたんですか……す、すみません……。」

シンジ「いや、いいんだよ。二人の表情見てるの結構楽しかったし。」

カズマ「おま、ーなんだよそれー……。」

シンジとカズマの言い争いが始まる。

その声を聞いて、アスマやヒビキ、野上やショウイチ、ソウジも集まってきた。

余計に盛り上がりを見せていた。

ユウスケ「盛り上がりを見せてるなあ……。」

海東「士は闘つてゐるつていうのだね。」

ユウスケ「まあ・・・あいつが一人で戦いたいって言つたんだ。士を信じていよ。ばい。」

海東「・・・まあ僕はべつにどうでもいいけど。」
ユウスケ「またまた・・・そんなこと言つて士のこと心配なくせにー！」

海東「本当に倒すよ?」デイエンドライバーをユウスケに向ける。
ユウスケ「わ、わかったよ!ごめんてーーー!」

海東は再び士と創設者の闘いの様子を見つめた・・・。

創設者はやはり押されていた。

息も上がっている。だが、まだ彼には究極の技が残つている。
先ほど見せたあの・・・爆風。

それをされたら元の子もない、そう考えている士はなるべく距離をとつていた。

その様子を察したのか、渡達原典ライダーはいつでも戦える準備をしていた。

それに気づいたショウイチやソウジも彼らに指示する。

ショウイチ「さつきの爆風が来たら、俺たちも突っ込むらしい。」

アスマ「ええ?!!士さんを守るつてことですか?」

ソウジ「いや、そのまま俺らの必殺技と士の必殺技を合わせる。そういうことじとじー。」

だ。

「うーん、どうだろ？ お前が倒されるんだから

FOUND/F—それはどうかな・・・?」

フアウンドが拳に力を込め始める。

それを見たディケイドは少し驚くが、何をしようとしているのか大体わかつたようだ。

! ! ! ! [F I N A L A T T A C K R I D E A L L R I D E R !

大きな爆発音

爆発がおさまつたとき。

うずくまる創設者と、傷つきながらもたつているライダー達の姿が
見えた。

その瞬間、夏海の顔には笑顔が戻ってきた。

夏海「士くん……」

ＤＣＤ／Ｆ／ＣＥ「……、創設者……まだやるのか？」

創設者「……ぐつ……」

士は変身を解き、創設者のもとへと近寄る。

創設者の体は少しづつ粒子化されてきていた……。

士「……？」

創設者「……、我ももう終わりか……。この世界は終わった。
・・また、新たな世界を・・作り出す時が来るまで・・・、私は
眠るとしよう……。」

士「この世界は救われたのか？」

創設者「どうだろうな、それは我にもわからん。世界を修復するの
は我の役目ではない……。」

海東「それは僕の仕事かな。」

士「……、海東。」

創設者の体はもう半分以上が粒子化されていたが、必死で自分の仮
面を取ろうとしていた。

しかし、その行為を止める士……。

創設者「……？」

士「お前の姿を見るのはまた今度にしとこやるよ。」

創設者「……ふん。やっぱりお前は甘いな。」

そう言つと……

創設者は完全に消えた……。

長かつたライダー大戦も・・・
これで終わりを迎える・・・。

次回

「仮面ライダーディケイド 本当のライダー大戦」

最終回！！

士達の旅の果てには何が残ったのか・・・
そして、世界の破壊者ディケイドの物語とは・・・

乞ひ期待！

第一十四話 戦いの終わり・・・（後書き）

後は最終話とエピローグを残すのみとなりました。
とりあえず土曜日（明日）完結となるのではないかな、と
考えています！！

これからのことなんですが・・・

次の小説を更新していくかなって思っています。
やっぱり次回も「デイケイド小説」です（（笑）
なんんですけど、まだ最終的な構想というか、
終わり方というものが見えていない状態で更新していく
状態になってしまいますので、

今回のような更新率にはならないかと思われます。
それでもよければ・・・！

また続けて読んでもらえるとうれしいな、と思います！！

主人公や大まかな小説の内容はまた次回・・・。
それでは、最終話・エピローグでお会いしましょう。

世界を破壊し、世界を繋げ！

最終話 テイケイドの物語（前書き）

最終話つてことで・・・。

なんだ、この展開！！（爆
と思われたかたもいるはずだ。

それは私も思っているから！！（笑
まあ、次のエピローグで真相がわかるよ

オイ

世界の破壊者テイケイド。

ライダー大戦の世界をめぐり、その瞳は何を見る？

最終話 テイケイドの物語

士は疑問に思っていた。

本当にこれで世界は救われているのだろうか、と。

消滅してしまった世界は・・・もう元には戻らないのではないか、と。

渡「士さん、どうかしましたか？」

渡が士に話しかけるが、士は気付いていないのか反応しなかった。そんな士を見て、コウスケは後ろから近づいた。

コウスケ「おい！士！」

士「・・・うわっ？！な、なんだよ！いきなり抱きつくな！」

コウスケ「つたぐ・・・。お前が辛氣臭い顔してるの似合わないぜー。紅さんが心配してたんだよ。」

士「・・・え？」

コウスケ「お前がなんか考え込んでるような表情してたからだろ？」

士「いや、・・・すまん。」

渡「いいいえ。・・・世界のことですか？」

士「あ、ああ。お前の世界は消滅されるんだろう？そういう世界は修復されないので、って思ってな。」

渡は士のその言葉に少しだけ反応したが、それについては何も答えなかつた。

渡「・・・でも。少なくともこの世界は救われた。あなた達の世界も。」

士「だがな・・・」

渡「いいんです。しょうがないんです。『ディケイドの物語』上……」

そうなることは……」
士「『ディケイドの物語』だと?」

士のその言葉に、剣崎が続けた。

剣崎「ああ。俺らの世界にはそれぞれの物語があつた。だが『ディケイド』によつてその物語は簡単に崩れ落ちた……と、今まで考へてたんだ。前回のライダー大戦でも。」

アスマ「つてことは、つまり。本当の原因はあの創設者にあつたつてことですか?」

ヒビキ「そうじうことになるなあ。」

アスマ「ひ、ヒビキさん……！」

アスマはヒビキになつてゐる。彼の世界にいた『ヒビキ』を思い出しながら。

ヒビキも本当の弟子のように……そして彼の世界にいた『明日夢』を思い出しながら……アスマと接していた。
その様子を二コ二コしながら見つめる津上と、そしてその津上のテンションについて行けていないショウウイチが傍に立つっていた。

津上「芦川さんは俺と同じ名前なんですねー。」

ショウウイチ「いや、大体のライダーが同じ名前だぞ。」

津上「あ、ほんとですねえ。乾さんも巧だし、尾上さんもタクミですねえ。」

ショウウイチ「()、()につまつて行けない……。」

乾巧と尾上タクミ。

乾の方はずつと黙つてゐる。それを氣まずそつとしているタクミ。
それに気づいた城戸とシンジは、ニヤッと笑いながらその二人に近

付いた。

城戸「おいーお前ら、全然話してないじゃねえか！」

シンジ「せつからく同じライダー同士が集まってるんだからさーはあ・・・！取材したい！レンさんも連れてこればよかつたなあ・・・。」

乾「はあ・・・めんどくせえ奴に捕まつた・・・。」

タクミ「あはは・・・。」

城戸「乾も尾上みたいな奴だつたらいいのになあ・・・。」

乾「おい、それどういう意味だよーーー！」

シンジ「レンやーん・・・」タクミに抱きつく。

タクミ「え、辰巳さん？！」

剣崎はうろたえていた。

勿論原因は・・・剣立カズマのことである。

カズマ「なあなあ！－なんであんなに強いんだ？！教えてくれよ！－！」

剣崎「うるさい！－少しば黙つてる！－」

カズマ「えー・・・あの金色のブレイドとかさあ・・・！－かっこよすぎだぜ！－俺もなりたいなあ・・・。」

剣崎「お前には無理だな。」

カズマ「な、なんだとお？！俺だつて・・・！俺だつてなつてやる！－！」

その様子を苦笑いしながら見ているのが紅渡とワタルだ。

渡「ははは、一人とも楽しそうですねー。」

ワタル「そうですねーーー！」

渡「ふふつ。」

ワタル「紅さんもバイオリンをしていますか？」

渡「あ、はい。します。」

ワタル「あのつ！よかつたら、僕に教えてほしくて・・・。」

渡「え・・・。僕なんかでよければ・・・？」

ワタル「ほんとですか？！ありがとうございます！・・・！」

天道とソウジはすみの方のイスに座り、優雅に「コーヒー（天道）とソウジ茶を飲んでいた。

ずっと黙っている。茶やコーヒーのお代わりを持ってきていた野上は、苦笑いをしながら足早にその場を立ち去っていった・・・。確かに、この場に長居することは難しいだろう・・・。

五代とユウスケ、そして夏海と海東はにぎやかに今までの旅のことについて話しているようだ。

五代も旅人だった。その時のことについて楽しそうに話す姿は、夏海達もすごく楽しい気分にさせてくれていた。

五代の話は面白かった。夏海達も士とともに回った世界のことについて語った。海東ははやく次のお宝を見つけたい、と張り切っていた。それを笑いながら話を聞いているユウスケも楽しそうだった。

誰も。士がないことに気づく者はいなかつた・・・。

士がいないことに気が付いたのは、それからだいぶたつた後のこと。

士は城を出て、歩いていた。

ただ、ひたすら。何の目的もないまま。

この世界に来てから、一回も帰っていない場所。それは・・・

士「・・・[写真館。】

何の建物もないこの地で、唯一たつている建物。

その中には夏海の祖父である栄次郎がいて……。

いつも自分が撮ってきた写真をファイリングしてくれていた。ボケボケの写真も「味があつていいよ。」と言つてくれた。

自分がこの写真館に居座った理由に、彼の存在があるからかもしれない。

気分が落ちているとき、いつも笑つて励ましてくれた。

そんな彼に・・・自分は何かしてあげられていたのだろうか。

士「・・・またいつか、な。」

結局士は写真館の中へ入ることなく、その場を去つていった。ドアの近くに、自分の愛用のカメラを置いて……。

夏海達は士を探しに、写真館に戻つてきていた。

ドアの近くに何かが置いてあるのを、海東が見つけた……。
海東「・・・これは・・・士の・・・。」
ユウスケ「・・・嘘だろ?」

夏海「な、なんで・・・。」

三人はショックを受けていた。

士が、何も言わずに去つていったことだけではない。カメラを置いていったことでもない・・・。

『もう士には会えない。』

そんな思いが強くよぎつてしまつたことだった・・・。

そんなとき、写真館のドアが開いた。

そこに立っていたのは、笑顔の栄次郎だった。

栄次郎「ああ、おかれり。・・・おや？それは土くんのカメラ・・・」

泣いている夏海、泣きそうなユウスケ、うつむいている海東を見て、栄次郎は何かを悟った。

それでも、それでも彼は笑顔でこう言った。

栄次郎「現像しないとね。ああそうだ。クッキー焼いてあるよ。食べておいで。」

F·H·

エピローグに続く…

最終話 テイケイドの物語（後書き）

個人的に、Wの最終回がエピローグっぽく感じます。

なんていうか・・・剣みたいな終わり方でもよかつたのでは？と考えてしまうのですが、Wの場合は冬の映画もあるのでああいう形を取らなければいけなかつたのかなあ、と思います。この小説は・・・どういう形をとるのか。

次のエピローグを読めば全てわかりますよ・・・（ニヤッ

それでは、次回作についてちょっとお話しします。

次回作は、ディエンンドとティケイドがメインの小説です。彼らの最初の関わりというか・・・なぜ海東は士のことを知っていたのか、というのにずっとひつかかっています。なので、小説を書こう！と思つたのです。

前回も言いましたが、まだこの小説の終わりが見えておりません。全て執筆作業が完了しているわけではないので、

今回の小説のような更新スピードは無理かと思われます。それでもよければ、続けて読んでくださるとうれしいです。それでは、エピローグでお会いしましょう。

全てを破壊し、全てを繋げ！

ヒューローク 旅の終わり（前書き）

世界の破壊者、ティケイド。
ライダー大戦の世界をめぐり、その瞳は何を見る？

ヒローゲ 旅の終わり

士が夏海達の前から消えて早2週間がたつていた。
その間にかわったことといえば・・・。

ユウスケが自分の世界へ帰つていった。海東が他の世界のお宝を探
しに行つた。

勿論、二人とも士を見つけたら連絡をくれ、と言つて。

ここは光写真館。

士が来る前と同じ・・・いつもの写真館に戻つた・・・。
そして夏海の世界に戻つてきて・・・。

久しぶりに会う友達や近所の人・・・。

それを見るたびに自分の世界に戻つてきたんだと実感する。
でも。何かが違う気がしている。
いつも近くには士がいた。

外で勝手に写真を撮つてきては、クレームの人人が写真館に押し寄せ
てくる。

そのたびに夏海は士を叱りに行つて・・・。

ユウスケ達がいなくなつてから、彼女はボーッとしているときが多
かつた。

そんな様子を栄次郎は心配しながら見ていたが、彼は何も言わなか
つた。

彼女がこんな様子になつてている原因を知つてゐるからだ。

栄次郎「夏海、コーヒーでも飲むかい？」

夏海「あ、はい・・・。」

栄次郎は3つのコーヒーカップを持つて夏海のもとに來た。

夏海「おじいちゃん……それ……。」

栄次郎「あれ。また土くんとユウスケくんのも注いじゃったなあ……。
・。」

夏海「……。」

夏海は土と出会って、旅を始めたところのことを思い出していった。
最初の世界はクウガ・・・ユウスケと出会った世界だった。
今までいろいろな世界を旅していたんだなあ、と思つ。
土の写真が入っているアルバムを見ても、思い出す。

夏海「……土くん……戻ってきて……。」

そんな孫の様子を見て、栄次郎はふと窓の外を覗いた。そしてこう
つぶやいた。

栄次郎「……これが本当の世界だつたのか。」

夏海「……え? おじいちゃん、何か言いましたか?」

栄次郎「……いや、なんでもないよ。さて、プリンでも作りうか
な。夏海、手伝ってくれ。」

夏海「……はい!」

夏海はこんな風に考えた。

土がいなくなってしまった理由を。

いなくなつたのではない……。また前に戻つたのだと。
きっと……またあのときのようになつたの……。

ふらつといの世界にやつてきて……。どこかでまた写真を撮つて
いる。

そしてその足で・・・「」の写真館にたどり着くのではないか、と。

夏海「……そんなわけないですよな。」

夏海はそのまま栄次郎のもとへと急いだ。・・・。

時は過ぎ、あれから1年がたつた。

海東「あれから土には会つたかい?」

夏海・いしえ・・・・・金く

とはないよな？」

夏海「まあ、どうあれーせっかくねじこむらさんがクッキーを焼い

ユウスケ「そ、そうだな！落ちてもしょうがないしな！」「

ユウスケ「あ!!!」ら!! 毎東!! それ、俺がとつておいたやつだろ!!

「アーティストの世界」

ユウスケ「なんだとー？！」

海東「そんな君はこのクサギーをあげるよ」

一
す
！
」

湯原（それ、二ノ三ノ入にかにとれ）
ユウスケ「ぐふつーーーーー！」

夏海「ユウスケ汚い……」

ユウスケ「こ、これ……」ンジン入つてゐ……海東……わざとだな……！」

海東「好き嫌いをする君が悪い。」

二人の争いから離れた夏海。

すると、呼び鈴が聞こえた（よつに感じた）。

夏海「あ、はーい……ちょっと待つてくださいねーーー！」

夏海は玄関へ向かい、ドアを開ける。

そして田の前にいたのは。

夏海「どなたですか……？」

?「これ、現像してほしいんだけど。」

夏海「……っ、士くん……？」

田の前にいた男は夏海を見て微笑んだ。

士「……ナツミカン、ただいま。」

Hピローグ 旅の終わり（後書き）

エピローグです！！いかがでしたでしょうか？

個人的には、おもしろーい終わり方になつたかな、
なんて思つたりします（（笑）

でも、いい終わり方にしたくて・・・がんばりました。
ブレイドみたいな終わり方でもいいかなあつて

思つたんですけど・・・やっぱり・・・ね（（笑）

ディケイドってすつきり終わつた感じがしないじゃないですか？
なので、すつきり終わらせたくて・・・こつなりました（（笑）

個人的に、ライダー大戦の小説はすつと書きたかつたものでした。
しかし、私には一番の弱点があつて・・・。

戦闘シーンが書けない！戦闘描写がわからない！といつ。

なので、もうほんとんビワンパターん・・・（（汗）

申し訳ない気持ちでいっぱいです・・・^v^；

もつと頑張らなきやなーつて思います！！

それでは、また次回作でお会いしましょう！！

次回作は下記のアドレスです！！ぜひ、これからも
読んでいただけると嬉しいです。

よろしくお願ひします！！！！！

<http://ncode.syosetu.com/n8919o/>

この後、総括を書いてこの小説を終わらせてよつと思ひます。
これまで応援していただき、ありがとうございました。

総括・仮面ライダー「ティケイド」とこの作品

「仮面ライダー『ティケイド』」という大きな作品を見たのは、実は今年に入つてからだつたりします。4月くらいだと思います。なぜその時期に見たのかといいますと。

高校生時代は特撮作品ノータッチとこう生活を送つていまして（汗）いろいろと理由はあるのですが、そのことはどうあえず置いておきます。

ティケイドに出てゐる俳優がかつこによつてこう・・・不純な理由で

見始めたわけですよ、私は・・・（笑）

それから、平成ライダーが大集結！という噂もひりつと聞きまして、「それは面白そうだ！」と。思つたわけです。

見始めてすぐに・・・第一話の冒頭シーンを見てハマりました。なんだかスケールが大きいな、と。

役者の技量は置いておいて、とにかくすごいな、と。半年で終わつた、というのは知つていました。

こんなスケールの大きいものを半年で終わらせられたのか、ヒ。で、最終回まで一気に見終えたんです。

そこで、あの有名な「偽予告」ですよ（爆

この時点で、もうすでに本当の映画は公開されています。でもまだDVD化は

されていない時期だつたんですね。なので見ていません。だからあの「偽予告」に興奮しちやつたんですね（爆）すごいー！と。こんな面白そうな映画、作っちゃうんだー！と。

まあ・・・思いつきり裏切られるんですけどね（笑）

そこがまたディケイドらしさないと今思えばそうなるんですけど。その映画を見た時は本当に信じられなかつたですね、え、これがそなうなの？って。

信じられなかつたところより、困惑いました。

そのとおもからかな、小説が書けそつだ、と思つたのは。

これは絶対に面白い小説が書ける。そう確信しました。

ただ・・・私にそんな技量があるとは思えなかつたんですね、その時点です。

他の方が書いているディケイドの小説もあまり見ないよつにしました。

(もちろん、今は読んでいますが・・・笑)

一度他の内容のディケイド小説を書こう！と思い立ち、小説ブログを立ち上げたこともあります。でも挫折しました。あまりにも書けなくて。

やっぱり、超長編作は無理だな、と。

だつたら、いい情報があるんじやないか、と。

「ライダー大戦のあの偽予告をふんだんに使つて書いてみよう」と思つ立つたわけです。

まあ、戦闘シーンの難さは田をつぶついていただいて・・・（汗）田をつぶれないほど雑なのはわかつています。自分でもあ、だめだなこれ。って

何回も思つています。何回も書きなおそつ・つて思いました。でも書き直したところで、うまくなるかといえはそつでもないんですね。

書いていろいろつけたりぱり戦闘シーンが増えてくるわけで。

結構省いてしまつたところとかもあります。（龍騎のカードとかあまり覚えてないので）

それでも読者の方がこころのせ・・・えええ?・・と思つてしまふわけです（爆
す）くうれしいことだし、喜んでいいはずなんですがど・・・。
なんだか気分が乗らないとこりうか・・・褒められると余計にわからなくなつてしまつといづか。

自分がうまく書を手だなんて、誰も思つていなこと思ひます。
本当の小説家の方でも、どこかには荒じとしたりがあつたりするかと思つんです。

私にはその荒ことこるしかない、とは思こますが・・・（笑
書いていく中で、やつぱり自覚したのは戦闘シーンの雑ぐ。話のつながりが雑。

私が思い当たるのはこの一つです。

でもきっと読んでくださつてこる方にこりうては、むつとあると思つんです。

どんぢん自分が思つたことをズバズバと言つてもむりつて構いません。
勿論傷つきはしますが、それが本当の読者の声などだと、自覚しなければいけないと思うので。

それを踏まえて、次回作へとつなげられる。やつ私は思つてこます。
なので・・・。

今までひつそりと読んでくださつていた方。
どういう形でもかまいません。

ぜひ、この小説を読んで、自分が本当に思つたことを素直に打ち明けてほしいのです。

そうすることにひつて自分の中にあるものが少しあはれかなるかな、
と思つので・・・。

ぜひ、よろしくお願ひします。

それでは、また、次回作でお会いできる」とを楽しみにしております。

約一ヶ月間、ありがとうございました。
これからもよろしくお願いします。

水城柳羅

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3873o/>

仮面ライダーディケイド 本当のライダー大戦

2010年12月23日00時32分発行